

富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第8次緊急発掘調査概要

No. 18 遺 跡 B 地 区

No. 19 遺 跡



1986年3月

富山県教育委員会

序

本県のほぼ中央に位置する小杉町南部の射水丘陵は、さまざまな遺跡が集中している地域の一つとして知られております。

これらの遺跡は、日本歴史の舞台に登場するような華やかなものばかりではありませんが、わたくし達の祖先が英知の限りをつくし、生きてきた足跡を如実に物語ってくれるものです。

この射水丘陵に建設が進んでおります小杉流通業務団地内遺跡群の調査も今年で8年目となり、これまでに北陸地方最古の瓦陶兼業窯が発見されるなど多くの成果を得ております。

今年度はNo.18遺跡B地区とNo.19遺跡の調査を実施し、奈良時代を中心とする集落跡や、旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺物を検出いたしました。とりわけ、No.19遺跡から出土しました陶製相輪は、本県の仏教伝播と普及を考える上で重要な遺物と言えます。

こうした調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護と古代史研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施に当たり、ご協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

富山県教育委員会

教育長 國香正道

例　　言

1. 本書は、小杉流通業務団地内遺跡群のNo18遺跡B地区とNo19遺跡の発掘調査概要である。
2. 発掘調査は、富山県土木部（用地課）の依頼を受けて、富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査は、富山県埋蔵文化財センター主任上野 章・文化財保護主事閑 清・同池野正男・同斎藤 隆・同神保孝造が担当し、清水友博・島田修一・佐賀和美（奈良大学学生）・酒井聖子（富山大学学生）ら各氏の協力を得た。
4. 調査事務局は、富山県埋蔵文化財センターに置き、主任高見三郎・文化財保護主事酒井重洋・同宮田進一が担当し、所長前田英雄が総括した。
5. No19遺跡から出土した種実遺体の同定については、富山大学教養部の吉井亮一氏の協力を得、その同定結果の報文をいただき本書に収録した。記して感謝の意を表します。
6. 本書の構成平面図に使用した矢羽根の先端は磁北である。
7. 写真図版に付した番号のうち明朝体のものは実測図番号である。
8. 資料整理は、調査担当者がこれに当たり、松島吉信（富山県教育委員会文化課文化財保護主事）・島田修一・大滝ひろみ・酒井聖子ら各氏の協力を得た。
9. 本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の助言を得て、III-3-(4)とV-3を上野 章、III-3-(3)とIV-2-(3)を池野正男、IV-2-(1)を松島吉信、その他を閑清が分担した。

目 次

I	序 章	1
1	遺跡の位置と環境	1
2	調査の経緯	2
II	No18遺跡B地区	5
1	立 地	5
2	遺 構	5
(1)	住居跡	5
(2)	建物・柵列	5
(3)	穴・溝	6
3	遺物	6
(1)	縄文時代	6
(2)	古墳時代	7
(3)	奈良時代	7
(4)	その他の遺物	8
III	No19遺跡（台地部）	16
1	立 地	16
2	遺 構	16
(1)	住居跡	16
(2)	穴・溝	18
3	遺 物	19
(1)	縄文時代	19
(2)	古墳時代	20
(3)	奈良時代	20
(4)	相 輪	20
IV	No19遺跡（谷部）	29
1	層序と遺構	29
(1)	層 序	29
(2)	遺 構	29
2	遺 物	31
(1)	旧石器時代	31
(2)	縄文時代	33
(3)	奈良時代	33
(4)	その他の遺物	37
V	調査の成果	38
1	No18遺跡B地区の集落跡	38
2	No19遺跡	39
3	相輪について	40
引用・参考文献		42
付載	富山県小杉流通業務団地内遺跡群No19遺跡谷部出土の種実遺体	43

挿図目次

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 第14図 遺構全体図（2次遺構面） |
| 第2図 小杉流通業務団地内遺跡分布図 | 第15図 遺物実測図・土器拓影図 |
| 第3図 地形と区割り図 | 第16図 遺物実測図 |
| 第4図 遺構全体図 | 第17図 遺物実測図 |
| 第5図 須恵器計測図 | 第18図 遺物実測図 |
| 第6図 遺構実測図 | 第19図 遺構全体図 |
| 第7図 遺構実測図 | 第20図 遺物実測図 |
| 第8図 遺物実測図 | 第21図 土器拓影図 |
| 第9図 遺物実測図 | 第22図 土器拓影図 |
| 第10図 遺物実測図・土器拓影図 | 第23図 遺物実測図 |
| 第11図 遺構実測図 | 第24図 遺物実測図 |
| 第12図 石錠計測図 | 第25図 相輪関係図 |
| 第13図 遺構全体図（1次遺構面） | |

図版目次

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 図版1 No18-B 遺跡 遠景・住居跡 | 図版12 No19 遺跡 住居跡・穴・溝 |
| 図版2 No18-B 遺跡 住居跡 | 図版13 No19 遺跡 穴 |
| 図版3 No18-B 遺跡 住居跡・穴 | 図版14 No19 遺跡 出土遺物 |
| 図版4 No18-B 遺跡 穴 | 図版15 No19 遺跡 出上遺物 |
| 図版5 No18-B 遺跡 出土遺物 | 図版16 No19 遺跡 出土遺物 |
| 図版6 No18-B 遺跡 山土遺物 | 図版17 No19 遺跡 出土遺物 |
| 図版7 No18-B 遺跡 出上遺物 | 図版18 No19 遺跡 出土遺物 |
| 図版8 No18-B 遺跡 出土遺物 | 図版19 No19 遺跡 出上遺物 |
| 図版9 No19 遺跡 遠景・住居跡 | 図版20 No19 遺跡 出土遺物 |
| 図版10 No19 遺跡 近景 | 図版21 No19 遺跡 出土遺物 |
| 図版11 No19 遺跡 谷部全景・土層断面 | 図版22 No19 遺跡 出上遺物 |
| | 図版23 No19 遺跡 種実遺体 |

表目次

- | | |
|---------------|------------------|
| 表1 流団遺跡群内調査一覧 | 表6 遺構覆土説明 |
| 表2 建物・櫛柱穴計測表 | 表7 No19遺跡石錠計測表 |
| 表3 建物・柵一覧 | 表8 流団No19遺跡石器計測表 |
| 表4 遺構計測表 | 表9 相輪関係一覧 |
| 表5 遺構覆土説明 | |

I 序 章

1 遺跡の位置と環境

小杉流通業務団地（以下流団と呼ぶ）内遺跡群は、射水郡大門町水戸田と小杉町青井谷の両地区に所在する。この地域は富山県のはば中央に位置する射水丘陵北端の台地にあたり、丘陵を二分して北流する下条川の左岸に位置する。また、射水丘陵周辺の台地は小谷が発達し、平地と接する所では樹枝状を呈する。No18遺跡B地区とNo19遺跡は、この流団遺跡群の東端にあたる。

一帯の地層は第三紀の青井谷泥岩層を基盤として、礫と砂泥からなる日ノ宮瓦層と太閤山火碎岩層が堆積する。太閤山火碎岩層の風化土は良質の粘土となり、現在でも瓦の原料として利用されている。また、当地域は最近まで山林原野となっており、古代手工業生産に必要な燃料・水・粘土などの供給態勢を備えている。

当地域では旧石器時代から現代に至るまで連続と人間の営みを見ることができる。とりわけ須恵器窯跡や製鉄遺跡が多いのは、恵まれた自然環境が大きな要因と考えられる。周辺の遺跡を概観すると弥生時代から古墳時代の墓跡として知られる上野遺跡や中山南遺跡があり、この時期の墓群として調山遺跡や五歩一古墳群などがある。本算における古墳発生の手がかりを得るための重要な地域である。流団遺跡群の小杉丸山遺跡では7世紀代の瓦陶兼業窯が発見され、瓦の供給先も判明したことから本県の古代史研究に一石を投じた。また、下条川を挟んで隣接する南太閤山I遺跡では、古墳時代から平安時代にかけての河道跡が発見され、人面壙古墳など重要な遺物が出土している。さらにその下層からは縄文時代前期の良好な遺物包含層が発見され、斯界の注目を浴びている。このように当地域は各時期の重要な遺跡を内包しており、とりわけ律令体制期の遺跡が多く、その素地の形成は弥生時代に遡れる。

No	遺跡名	時代
1	大坂古墳	古墳
2	石名山窯跡	古墳・奈良
3	4世寺窯跡	古墳
4	五歩一古墳群	古
5	宿屋古墳	古
6	上野	縄文・弥生・古墳
7	大池窯跡	奈良
8	南太閤山I	縄文・弥生・古墳
9	南太閤山II	縄文・古墳・奈良
10	東郷所西古墳	古
11	山王宮古墳群	古
12	日ノ宮	奈良・平安
13	姫山	弥生
14	中山南	古
15	二つ古墳群	古
16	表野	先土器・山
17	東山II	縄文・奈良
18	高山	先土器・縄文
19	上野赤坂A	先十郎・山
20	新造池A	先土器・縄文
21	土代A	先土器・縄文
22	石友B,C	先土器・奈良
23	野III A	奈良



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50000)

2 調査の経緯

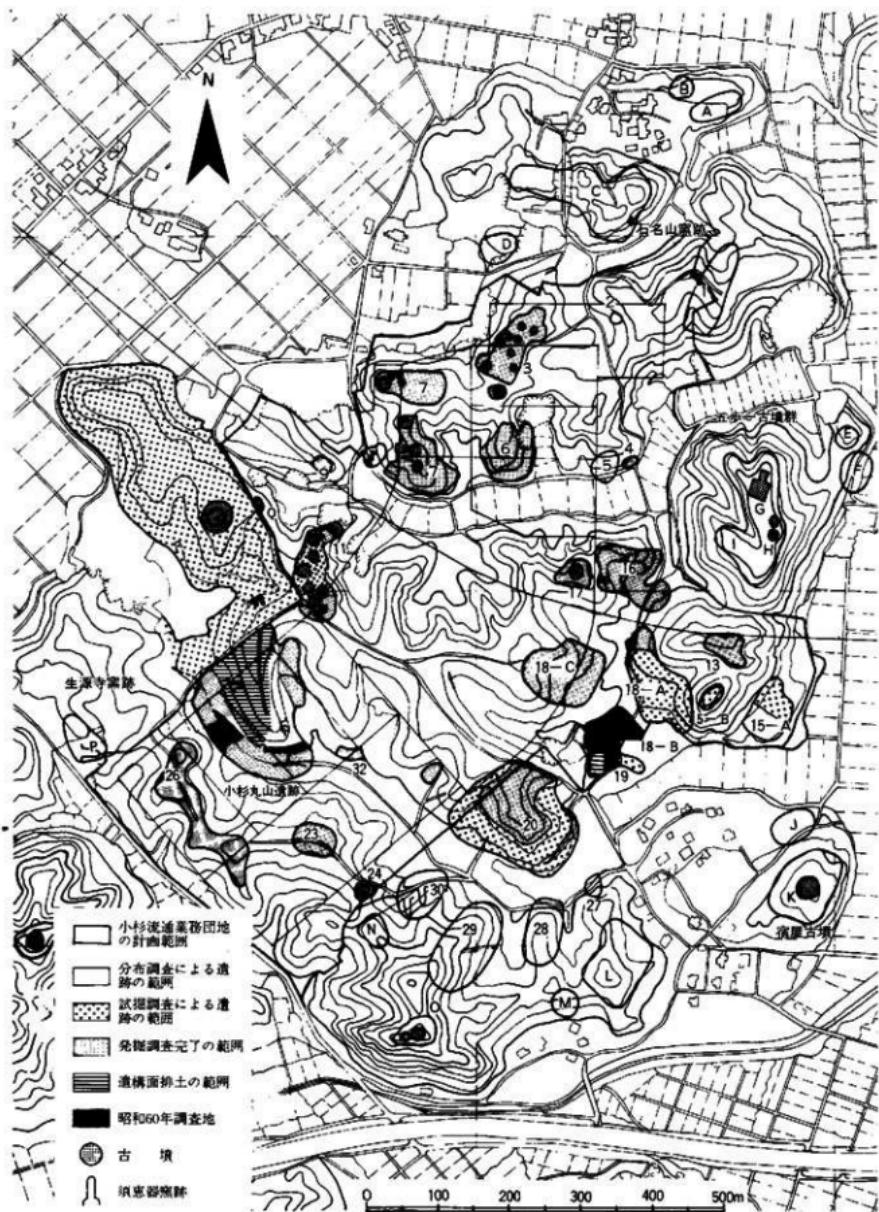
昭和48年、富山県は流通機能の向上と道路交通の円滑化を図る目的で、小杉・大門両町にまたがる約51haの規模をもつ小杉流通業務団地建設計画を策定した。富山県教育委員会は、これに対し昭和51年に建設予定地内の遺跡分布調査を実施し、28箇所の遺跡の存在を確認した。以後、工事は54年度から開始され、現在に及び8割近くの造成を完了し、分譲も開始された。調査は表1に示したように昭和53年度から開始し、常に工事に先行して実施した。

本書に収録したNo18遺跡は、地形からA・B・Cの3つに区分し、A地区の一部とC地区は昭和55年に調査を完了し、両遺跡とも奈良時代を中心とする住居跡等を検出している〔上野他 1980・1982〕。今年度調査したB地区はA地区とC地区の南東に位置し、同様の内容を持つ。調査期間は4月25日から7月18日まで延べ日数46日間である。

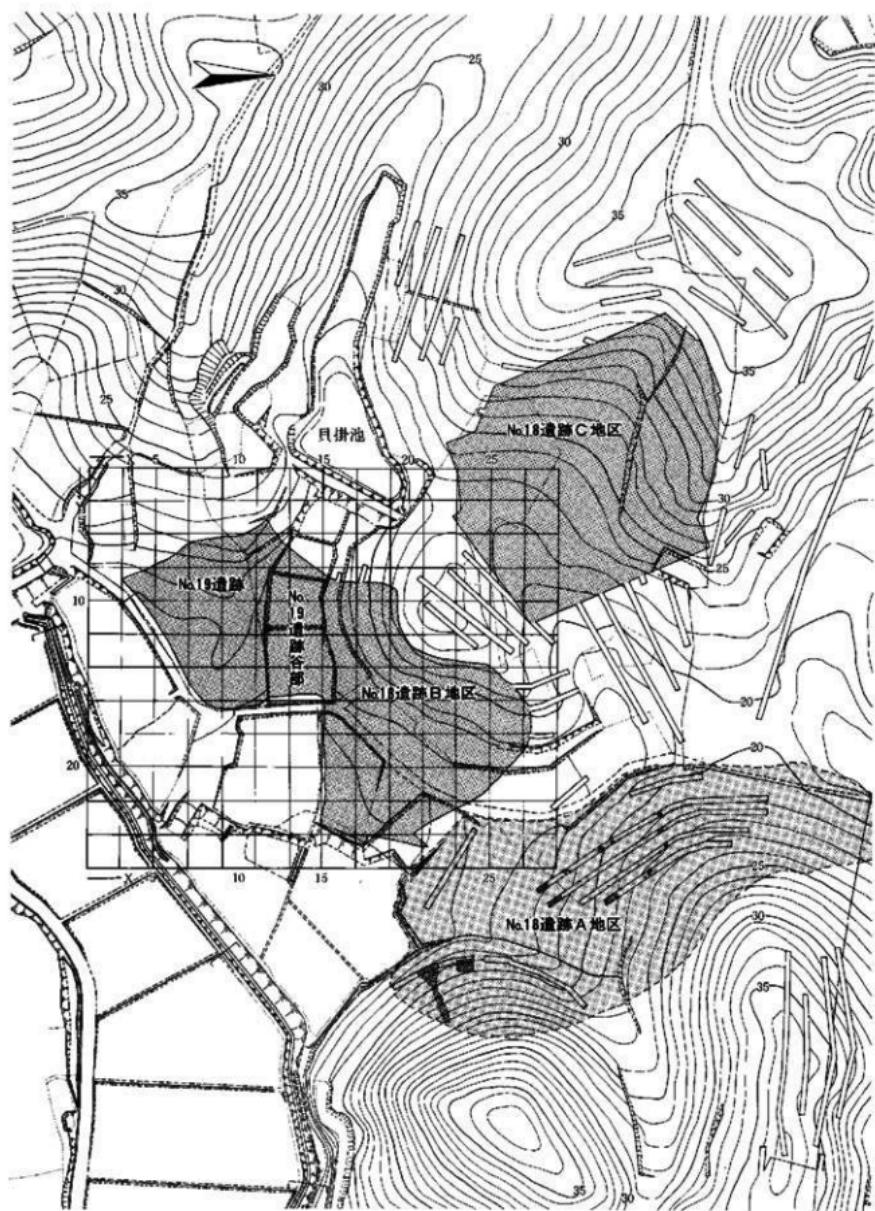
No19遺跡は昭和56年度に試掘調査を実施し、遺跡の内容を把握している。その後、流団遺跡群の谷部において相ついで遺物が発見されたことからNo18遺跡B地区とNo19遺跡の間にある谷部の試掘調査を実施し、繩文時代前期を中心とする包含層を確認した。調査はこの谷部を含め4月25日から8月27日まで実施し、延べ68日間である。なお、No19遺跡の一部は調査の計画上から次年度以降に繰り越した。

年度	遺跡	所在地	時代	種類	上衣・下衣・遺物		文書名
					土器	石器	
1次 53	No20	小杉町青井谷字丸山	先土器・繩文・平安 奈良(?)	縦溝 縦	住居跡3・段段遺構1・穴18・擦器・陶器・土器 石器・生土器・土師器・擦器等、まいこ形 木製品		富山県小杉町交通業務 開発地No20遺跡発掘調査概要(1979)
	No9	大門町水戸田字名山	繩文		縫1		
2次 54	No13	小杉町青井谷字丸山	奈良・平安		段段遺構1・穴13		
	No16	大門町水戸田字丸山	繩文・六朝・奈良(?)	縦溝 縦 橫	住居跡1・泊居遺構2・段段遺構1・穴9・ 縦溝土器・石器・土師器・擦器等、ヘラ骨 土器		富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺 跡群第2号遺跡発掘調 査報告(1980)
3次 55	No17	"	繩文・奈良・古墳	古	擦1・円筒1・木柵桶1・穴5・繩文土器・ 石器・石皿・すり石・陶器・土器・刃玉・刀子		
	No18・A地区	小杉町青井谷字丸山	奈良	縦溝 縦	住居跡1・穴5・傳5・土師器・擦器等		
4次	No3	大門町水戸田字名山	縦文・古墳	縦溝縫 縦	住居跡1・円筒8・穴5・繩文土器・土師器 擦器等、小玉・管5・石製結晶等、瓦器・孔田版 土器		
	No7	"	繩文・古墳・奈良・平安	縦溝 縦	住居跡27・円筒4・須恵器遺跡?・瓦器・柱頭 7・穴・擦器・繩文土器・石器・土師器・擦器等、 鐵製品・臼臼・擦器・土器・盆		富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺 跡群第3・4次緊急発 掘調査概要(1982)
5次 56	No18・C地区	小杉町青井谷字丸山	繩文・奈良(主)・平安	*	住居跡2・泊居遺跡1・穴・馬糞堆・陶器・土器 石器・土師器・擦器等、内面磨て具・執器		
	No20・B地区	"	繩文・六朝・奈良		石斧・ナリガ・土師器・擦器等		
6次	No32	"	先土器・平安	縦 橫	段段遺跡2・穴2・ナマコ形石器・土器・擦器・須恵器 穴2		
	No2	大門町水戸田字名山	"		住居跡2・円筒2・穴13・繩文土器・石器・土 器・土師器・擦器等、鉢		
7次 57	No3	"	繩文・古墳		住居跡14・漆・炭灰・擦器等、多數・所附・紗文1 ・石器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆		
	No6	"	先土器・繩文・古墳(主) 奈良(?)	縦溝 縦	住居跡3・泊居遺跡4・穴多數・馬糞堆・土器 石器・土師器・擦器等、鉢・器・瓦器・ガラス 片・白玉・擦器		
8次 58	No7・北地区	"	繩文・六朝・奈良・中世	縦溝 縦	穴2・縄文土器・石斧・擦器等		
	No1	"	繩文(?)・奈良		住居跡2・泊居1・擦器等、多數・所附・紗文1 ・石器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆		
9次 59	No23	小杉町青井谷字丸山	繩文・奈良		円筒1・繩文土器・ナリガ・土師器・擦器等		富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺 跡群第5・6次緊急発掘調 査報告(1983)
	No24	"	繩文・奈良(主)・奈良	古	内筒1・洞1・縫1・擦器・石器・瓦器・土器 石器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆		
10次 60	No26	"	先土器・繩文・奈良		内筒8・洞1・縫1・擦器・石器・瓦器・土器 石器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆		
	No11	大門町水戸田字丸山	先1・繩・繩文・古墳	古	内筒9・ナマコ形石器・擦器・土器・洞1・擦器 等、多數・鉢・器・擦器等、瓦・擦器等・土器 石器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆		
11次 61	No21	小杉町青井谷字丸山 大門町水戸田字西原	先土器・泊居(主)・奈良(?) 奈良・平安・中世	縦溝 縦	住居跡24・泊居遺跡5・瓦器・馬糞堆1・須恵 器・擦器等、瓦器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆 等、ナマコ形石器・擦器等、瓦器・土器・盆 等、擦器等		
	No16	小杉町青井谷字丸山 大門町水戸田字西原	繩文・奈良(?)	縦溝 縦	住居跡3・泊居2・擦器等、多數・鉢・ 土器・擦器等、瓦器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆 等、擦器等		富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺 跡群第6・7次緊急発掘調 査報告(1984)
12次 62	No22	小杉町青井谷字丸山 大門町水戸田字西原	先土器・繩文・古墳 白鳳(?)・奈良・平安 中世	縦溝 縦	住居跡3・泊居遺跡1・擦器等、多數・ 鉢・土器・擦器等、瓦器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆 等、擦器等		
	No21	小杉町青井谷字丸山	先土器・繩文・古墳 白鳳(?)・奈良(?)・奈良 平安・中世	縦溝 縦	住居跡3・泊居遺跡1・擦器等、多數・ 鉢・土器・擦器等、瓦器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆 等、擦器等		
13次 63	No21	小杉町青井谷字丸山	先土器・繩文・奈良(主) 飛鳥・白鳳・奈良・平安	縦 橫	撲土穴多底・鉢片・繩文土器・石斧・すり石・ 生土器・土師器・擦器等、瓦・木製品		富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺 跡群第7・8次緊急発掘調 査報告(1985)
	No18・B地区	"	繩文・古墳・奈良(主) 中世	縦溝 縦	住居跡3・泊居遺跡2・穴多數・鉢・ 土器・擦器等、瓦器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆 等、擦器等		
14次 64	No19	"	先土器・繩文(主)・奈良 中世	*	住居跡2・泊居遺跡2・瓦器・馬糞堆1・須恵器 等、鉢・土器・擦器等、瓦器・土器・盆		
	No19	九山(HM621)	先土器・繩文・古墳 白鳳・奈良・平安 (主)・中世	縦溝・撲土 縦 橫	立柱柱跡1・住居跡2・瓦器・馬糞堆1・須 恵器等、瓦器・土器・擦器等、瓦器・土器・盆 等、擦器等		第8次緊急発掘調査 報告書(1986)

表1 流団遺跡群内調査一覧



第2図 小杉流通業務団地内遺跡分布図



第3図 地形と区割り図 (1/1500)

II No.18遺跡B地区

1 立 地

No.18遺跡は射水郡小杉町青井谷字丸山に所在する。流団遺跡群の東側にあり、No.20遺跡とNo.18遺跡A地区の中間に位置している。射水丘陵台地に形成された小谷のやや奥に入った所で南東に向するゆるやかな斜面地である。この場所からは東側に狭隘な谷平野が開け、下条川を望むことができる。遺跡のすぐ西には貝塚池、南には馬洗池があり、いずれも近世に小谷を堰止め造られた灌漑用の池である。池の造成後は小谷の水田化も急速に進み、この地形に多く見られる千枚田が形成される。遺構はこれらの谷に臨む台地縁辺に多く検出された。

2 遺 構

台地の緩斜面を中心に住居跡3棟、穴21、溝3そして多数の小穴を検出した。遺跡の中央部は水田化のため削平を受けており、かなりの遺構が消滅したものと考えられる。

(1) 住 居 跡 (第6図・7図)

1号住居跡 遺跡の北端斜面上で検出した。方形の竪穴住居跡である。北側と西側には立ち上がりに沿って排水溝が掘られ、住居跡外へと導かれる。床面中央にも南北に排水溝が掘られ、同様に住居跡外へと導かれる。これは発掘の際にも西側床面からかなりの湧き水があったことから、住居跡内の排水に不可欠な施設であったと考えられる。床面からは多量の遺物が出土している。割合では須恵器が多く、杯身、杯蓋、甕があり土師器では甕が数点出土したのみで、復元可能なものは2点であった。また、ピット8付近には、焼土が見られ、その付近から刀子と埴輪が出土している。なお、須恵器には焼け歪みのあるものや亀裂のはいっているものが多く、隣接するNo.18遺跡A地区やNo.16遺跡の窯跡との関連性を示唆するものである。

2号住居跡 調査区の東端で検出した。ほ場整備の際に若干の地山の削平を受けており、かろうじてプランを確認できた。一辺3.8mの方形で4本柱の竪穴住居である。北東側に不整形の浅い穴があり、南側の角は民地に入る。出土した遺物はいずれも小片であるが古墳時代後期の甕、杯、碗、高杯である。柱間は約2m。

3号住居跡 X17・18Y15・16区の遺物集中地点で検出した。床面は黒褐色土面に作られて、地山土である黄土がわずかに混じる。カマドの位置から推してN-62°-Wに主軸を置く長方形の竪穴住居跡が考えられる。山側での単辺は約3mで、溝03はこの住居跡に付随すると考えられる。カマドは上面の擾乱もあって両袖とも検出できなかつたが主軸よりやや北側に寄る東壁面に作られる。焼土面からは甕の破片が出土している。床面には多くのピットが検出されたが、主柱穴は明確でない。

(2) 建物・構列 (第4図、表3)

1号建物 3号住居跡の東側に位置する。2×4間の掘立柱建物で桁行7.42m(24.5尺)、梁行4.68m(15.4尺)の規模を持つ。長軸がN-23°-Eとなり、3号住居跡と後述の2号建物の長軸と直交する。柱穴の掘り方はいずれも小さく30cm前後である。柱間は桁行上で概ね6尺となり、梁行は7尺前後となる。

2号建物 2×2間の純柱の建物である。柱間は6~7尺の間でばらつきが見られるが柱穴底面の高さに均一性が見られる。

3号建物 3号住居跡にはほぼ平行するように長軸をとる。1×2間の掘立柱建物で桁行4.44m(14.7尺)、梁行2.6m(8.6尺)の規模である。柱間はやや不規則であるが表2に示した柱穴底面の高さから建物と認めた。

(3) 穴・溝 (第6・7図)

検出した穴は21、溝は3である。これらの規模を示す計測は表4に示す。ここでは特筆すべきものについて記す。

焼土土壤 穴08、穴17、穴18、穴19と穴20がある。これらは遺物の有無と規模から二つに分類できる。すなわち、穴08、穴17そして穴19のように規模が大きく、厚い焼上床面を持ち、かつ土器が出土するタイプと規模が小さく床面や壁面がわずかに焼けている穴18や穴20の二者である。前者の中で最も遺存状況が良いのが穴19で、床面から多量の上部器が出土している。土器の内訳は大形の長脚甕が1点と小型の甕7点である。大部分は復元可能であり、完形に近い状態で埋没したものと考えられる。穴は山側の床面と壁面が強く焼けており、遺物は谷側に集中する。焼上床面はかなり厚く、10cmにも及ぶ。また穴17では2枚の床面が確認され、2回以上使用されたことを意味する。

後者の穴は、この射水丘陵台地の遺跡でよく見られるものであり、伏焼法による炭窯と考えられている。なお、穴16はわずかに焼上の堆積物が見られ、前者に属する可能性を持つ。

溝 溝03は3号住居跡に伴うものと考えられ、溝02は3号建物の棟の方向と一致することからそれとの関連が考えられる。溝02もたぶん他の遺構と関連しているものと考えられるが、周辺が民有地となり調査対象外であるため確認できなかった。

3 遺 物

出土した遺物は繩文、古墳、奈良時代と近世以降のものである。遺構に伴った遺物については遺構図の中に示した。

(1) 繩文時代 (第10図87~91)

いずれも破片で出土区にもばらつきがある。89はX16Y14、88・89はX19Y18、90はX16Y22そして91はX18Y22の耕作土からの出上である。89は隆帯を基調とし、へラ状工具で刻みが施される。88は横位の隆帯から直交する縦の隆帯が施される。器壁は薄い。89も隆帯による施文であり、表面の磨滅が著しい。90は鉢の口縁部で、LRの繩文が施される。器壁は薄い。91は深鉢の底部で胴部にLRの繩文が見られる。

P.No.	柱穴底面の標高 m	遺構検出面からの深さ cm
1	15.78	33
2	15.84	25
3	15.80	32
4	15.75	28
5	15.83	16
6	15.87	24
7	15.97	17
8	15.88	32
9	15.91	22
10	15.93	15
11	15.91	26
12	—	—
1	16.39	27
2	16.31	19
3	16.30	4
4	16.19	10
5	16.12	11
6	16.17	9
7	16.28	8
8	16.28	19
9	16.14	17
1	16.12	24
2	15.96	20
3	16.08	15
4	16.03	14
5	16.00	17
6	15.93	46
1	16.01	9
2	15.88	28
3	16.09	15
4	16.24	5
1	16.36	19
2	16.47	15
3	16.32	36
4	16.27	31
5	16.36	14

表2 遺物・構造穴計測表

遺構名	棟・櫓の方向	方 位	柱間数 桁×梁	規 模 m 桁×梁 (尺)	柱 間 m (尺)	
					桁	梁
1号建物	南 北 棟	N-23°-E	4×2	7.4 × 4.6 (24) × (15)	2.0・1.9・1.7・1.8 (6.6)・(6.4)・(5.5)・(5.9) 1.6・2.0・1.9・2.1 (5.1)・(6.6)・(6.4)・(6.9)	2.6・2.1 (8.6)・(6.9) 2.2・2.4 (6.9)・(7.8)
2号建物	南 北 棟	N-1°-W	2×2	4.0 × 3.7 (13) × (12)	2.1・1.8 (7.2)・(6.1) 2.0・1.8 (6.7)・(6.0)	2.1・1.7 (7.0)・(5.5) 2.1・1.7 (6.9)・(5.5)
3号建物	東 西 棟	N-50°-W	2×1	4.4 × 2.7 (14.5) × (9)	2.5・2.2 (8.2)・(7.1) 2.5・1.9 (8.2)・(6.4)	2.6 (8.6) 2.5 (9)
1号櫓	東 西	N-65°-W	[4]	[8.1] (26.7)	2.4・1.9・1.9・[1.9] (8)・(6.4)・(6.4)・(6.4)	—
2号櫓	南 北	N-41°-E	4	8.4 (27.7)	2.4・1.7・2.3・2.0 (8)・(5.5)・(7.7)・(6.6)	—

表3 建物・櫓一覧 []内数字は推定値

(2) 古墳時代 (第8図1~6)

いずれも2号住居跡からの出土品である。須恵器はない。

楕 (1・2・5・6) 杯形のものも一括する。1は口縁端部でわずかに外反する。内外面ともにヨコナデされる。2は体部上半で内湾ぎみになり、口縁端部を丸くおさめる。内面はヘラミガキ、外面は上半部をヘラミガキ、下半部はナデ、底面にはヘラケズリが施される。5の口縁部はほぼ直立する。調整は2と同様である。6は杯に分類するべきかもしれない。口縁部は外反するが端部を丸くおさめる。風化が著しい。

高杯 (4) 小破片であるため全体の形状は窺い知ることはできない。また、器味も風化しており調整不明。

甕 (3) くの字形に外反する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめる。口縁部の内外面ともに横方向にナデる。頭部に近い位置ではハケ目がわずかに見られ、ハケ目後ナデの調整となる。体部は外面ともハケ目。

(3) 奈良時代 (第8図7~25・第9図26~42・第10図43~86)

土師器 豆、鍋、瓶、楕、椀、壇場などがある。豆が多いことが特徴的である。

甕 (7~25) いずれもロクロ土師器。口径の大きさからI・II・IIIに分類する。甕Iは口径21cm~24cm、いわゆる長胴甕である。21~23・25がこれで21は口縁部がくの字に外反し、端部の断面が三角形となる。胴部外面は縱方向のハケ目、内面は横方向のハケ目調整が施される。22は風化が著しく外面の調整は明らかでない。内面にわずかに横方向のハケ目が見られる。23は口縁部の内外面ともにロクロナデされる。胴部の調整不明。25は口縁部内外面ともにロクロナデされ、胴部外面はカキ目となる。体部内面はロクロナデである。甕Iでは25以外全て煤の付着が見られる。

甕IIは口径16~16.5cmのもの。15・24がそれである。15は胴部上半部をカキ目、下半部はケズリが行われる。胴部内面は風化が著しく調整不明。24は内外面ともにロクロナデされ、胴部大半を欠く。

甕IIIは口径10~13cmのものが最も多い。穴19からまとまって出土し、共通性がある。すなわち、口縁部がゆるく外反し、胴部外面は縱方向のハケ目とケズリが行われる。そして内面は横方向のハケ目で口縁部は内外面ともにロクロナデされる。そして頭部を意識するかのように口縁部の屈曲部にロクロナデされるのが特徴的である。穴08から出土した14は胴部外面がケズリ、内面に横方向のハケ目が見られ、基本的には穴19出土のものと共通する。しかし、同じ穴から出土した18は胴部上半をカキ目、下半には指頭による圧痕を残す。内面はすべてロクロナデされる。

鍋 (26~28) 26と27は穴15からの出土である。口縁部がゆるく外反し、端部がつまみ上げられ断面三角形を呈する。口縁部の内外面ともにロクロナデ。体部外面上半はカキ目、下半はケズリである。26は27と比べケズリが体部の肩近くまで行われる。体部内面はロクロナデされるが下部にハケ目を残す。27の外面には煤が付着する。28はX17Y16区から出土し、3号住居跡の上面にあたる。口縁部はS字状に外反し、体部下半にケズリが見られる。

甕 (34・35) 34の口縁端部では内側に縫を作る。体部中央に一条の沈線が入る。35は内面をハケ目調整し底面近くはロクロケズリされる。底部に近い外面には断面三角形の粘土を貼り付け、古座状に仕上げる。なお、34と35は胎土色調とともに酷似しており、同一個体の可能性もある。また34の外面には剥離痕が認められ、32のような把手が付くものと考えられる。

楕 (31) 口径20cm、器高は推定で6.4cm X17Y14から出土し、口縁部は丸く仕上げる。内外面ともにロクロナデ

遺物名	平	圓	測			出土遺物	時期
			長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)		
穴-04	円	形	36	32	6	須恵土器	縄文中期
06	椭	円	78	46	10		
07	椭	円	70	58	50		
08	円	形	236	(236)	32	土師器	奈良
09	円	形	90	82	12		
10	椭	丸	216	122	34		
11	円	形	104	96	36		
12	椭	丸	108	92	34	須恵器	奈良
13	不整	椭	146	46	26	須恵器	奈良
14	椭	丸	64	42	8		
15	不整	片	96	66	14	土師器	奈良
16	円	形	284	258	36	須恵器	奈良
17-1	長	方	302	64	24	土師器	
17-2	不整	片	260	206	32	土師器	
18	円	形	116	(116)	6		
19	椭	丸	192	158	60	土師器	奈良
20	椭	丸	94	54	14		
21	不整	円	94	48	18		
30	椭	片	112	82	26		
31	椭	丸	144	96	18		
44	椭	円	40	28	18	須恵器	奈良
50-01	—	—	244	16	12		
02	—	—	314	12	10		
03	—	—	474	28	14		

表4 造構計測表 ()内数字は推定値

され、体部外面の下半部にカキ目を残す。

壺 (33) 1号住居跡から出土した。器壁の厚い楕形品で内外面に指頭痕が見られる。口縁端部はナデで丸くおさめる。内面は2次的な加熱のためか灰色を呈し、黄褐色の鉱滓が付着する。鉱滓は分析していないために詳細は不明であるが、わずかに磁着が認められることから鉄滓と考える。

器種不明土器 (29・30・38~40) 29は杯蓋状のものである。口縁部近くの内面に須恵器の反り状の突起がある。外面にも同じく断面三角形の突起が付き、内外面共ていねいなヘラミガキが施される。内側は黒色処理される。30は杯状の土器で、底面に剥離痕が認められることから高台もしくは脚が付くものと考えられる。内外面ともていねいなヘラミガキで内面は黒色処理される。29と30は出土区もX17Y17と同じで胎土、製作技法も類似していることからセットになる可能性がある。なお、このような土器は普見では無いが、出雲国宇摩出土の須恵器に類似がある。〔坪井他 1970〕。38~40は器壁が厚く図示した位置で見ると口縁部が窄む形になる。38の内面には指頭によるナデが見られる。これらは破片も小さく数も少ないため全体の形状を窺い知ることはできない。

須恵器 杯身、杯蓋、壺蓋、壺、甕がある。全般的に歪みや亀裂のあるいわゆる「ハネ物」の多いのが目立つ。

杯A (58~64) 無高台の杯身で7点の出土があった。第5図により杯A I (60・61・64) A II (58・59・62・63) とする。調整においては向者とも内外面をロクロナデで仕上げ底部外面はヘラ切りされる。58・62・63は底部外面のヘラ切り後ナデ付けが行われる。焼成不良品が目立つ。

杯B (65~82) 第5図により6類にわたる。すなわち、杯B I (81)、杯B II (73・76・78)、杯B III (71・75)、杯B IV (69・72・74)、杯B V (65~68)、杯B VI (65)となる。基本的な調整は内外面ともにロクロナデ、底部外面はヘラ切り後高台を貼り付け、ロクロナデ仕上げを行う。杯B IV~VIでは底部内面が中心までロクロナデされるのにに対し杯B I~B IIIでは不定方向のナデが目立つ。高台は低くふんばり、外縁部が上がるものが多い。79・82の外縁には一条の沈線が施され、77と共に金属器模倣形態のものである。78の底部外面にはヘラ記号がある(図版6-21)。

杯蓋 (43~53・55~57) 法量により4つに分類される(第5図)。平坦な頂部から縁部へはなだらかに移行するものが多いが55・57のように笠状を呈するものが見られる。53は扁平になるが焼成歪みによるものである。端部は断面三角形で短く下方に曲がる。つまみは宝珠形で扁平である。頂部はロクロケズリが行われ、縁部にかけてはロクロナデ仕上げとなる。内面もロクロナデを基調とし、55はロクロナデ後不定方向のナデが入る。杯Bとの関係では杯B IIIに対して蓋I、B IIIに対して蓋III、B IVに対して蓋IVとそれぞれ対応する。

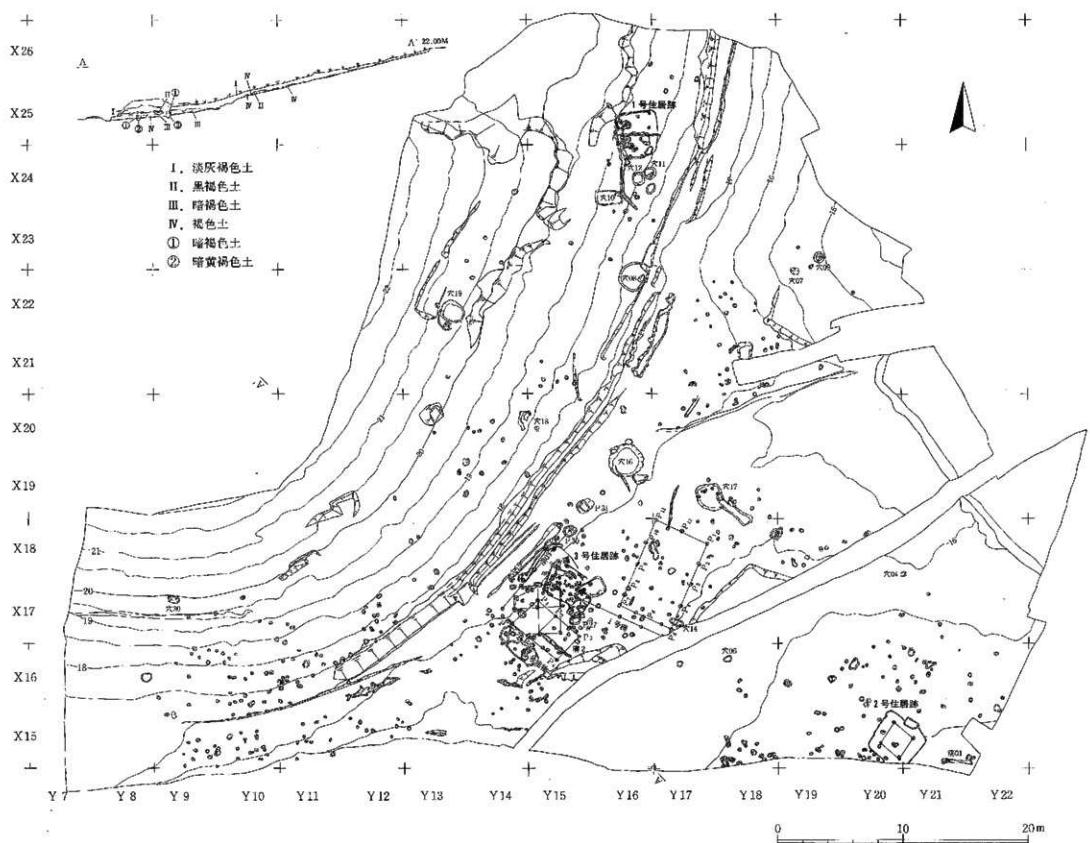
壺蓋 (54) 天井部に一条の沈線を施す。天井部はロクロケズリ、その他はロクロナデにより仕上げる。

壺 (36・85・86) 36は底部。なで肩で直立する短い頸が付くものと考えられる。外面はタタキの後ヘラケズリを行い、内面には円形アテ具痕が残る。底部外面はタタキの後ナデする。底部内面はナデによる仕上げとなる。85は体部上半から口縁部にかけてロクロナデ、下半部はロクロケズリ、内面はロクロナデされる。外部底面はヘラ切り後高台を貼り付け、ナデによる仕上げとなる。底面にはヘラ記号がある。頸部に一条、体部上半に二条の沈線が入る。86は長頸壺の破片である。頸部中央に連続した二条の沈線が施される。

甕 (37・41・83・84) 37は1号住居跡から出土した。歪みが大きく、亀裂も数箇所に入る。流動性の容器としてはその機能を失う。口縁部は内外面ともロクロナデ、体部にはタタキがみられる。83は頸部にヘラ状工具による波状文が施される。84は口縁部内面に縫をもち、体部外面はタタキの後、カキ目が施される。内面には放射状アテ具痕が見られ、その上にハケ目調整される。

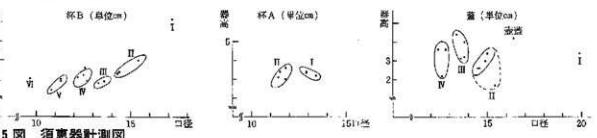
(4) その他の遺物 (42・図版8)

42は鉄製刀子である。鋒が著しい。茎はないものと考えられる。この他に図版8の右下に示した近世陶磁器がある。越中瀬戸、唐津の類である。

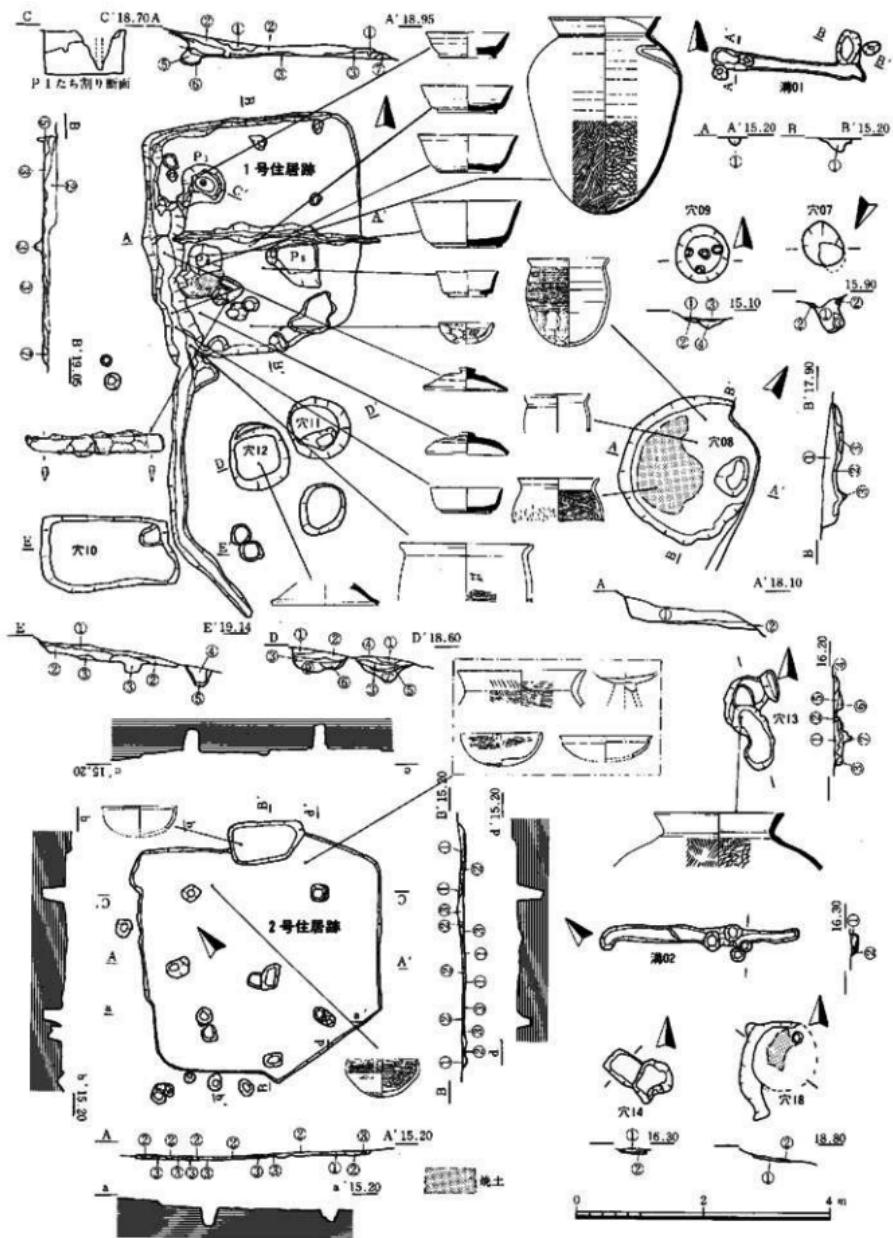


第4図 造構全体図 (1/300)

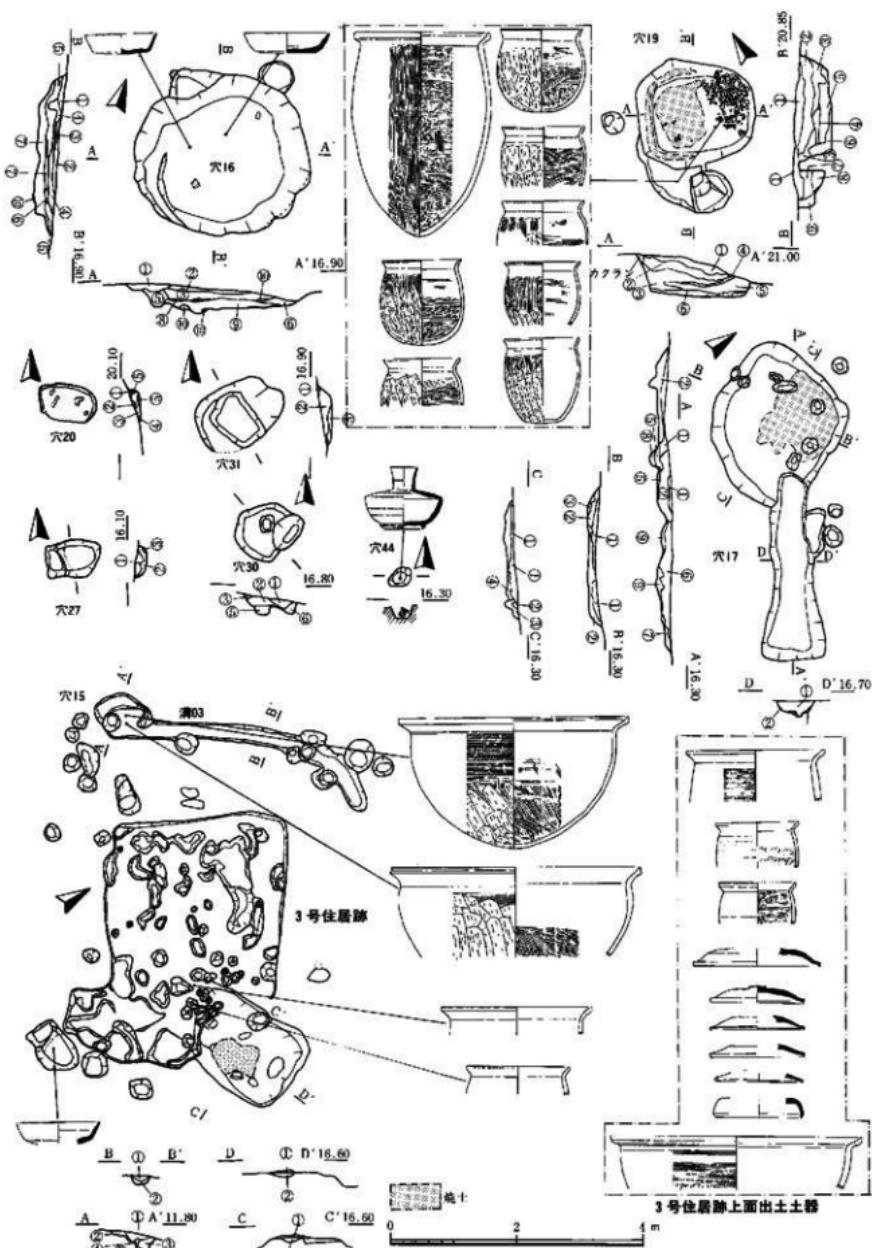
5 遺構覆土說明



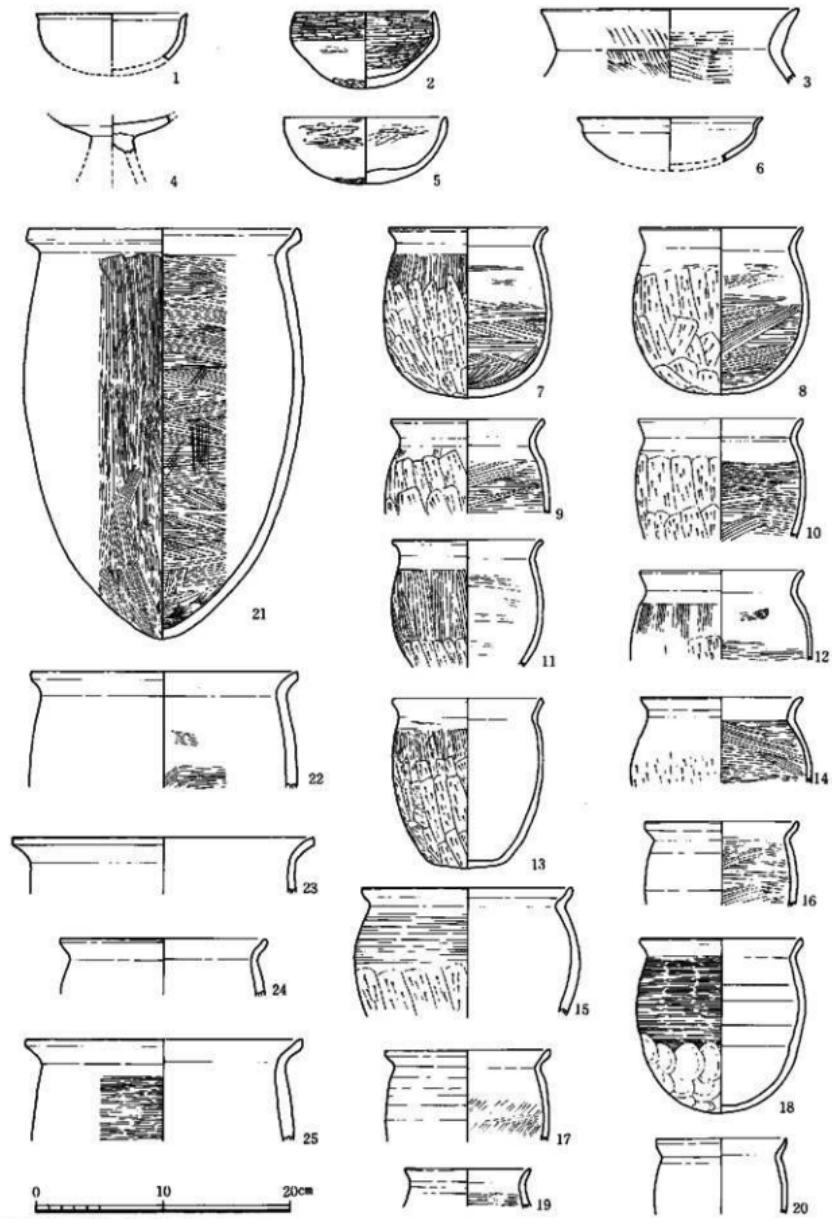
5 図 須慮器計測図



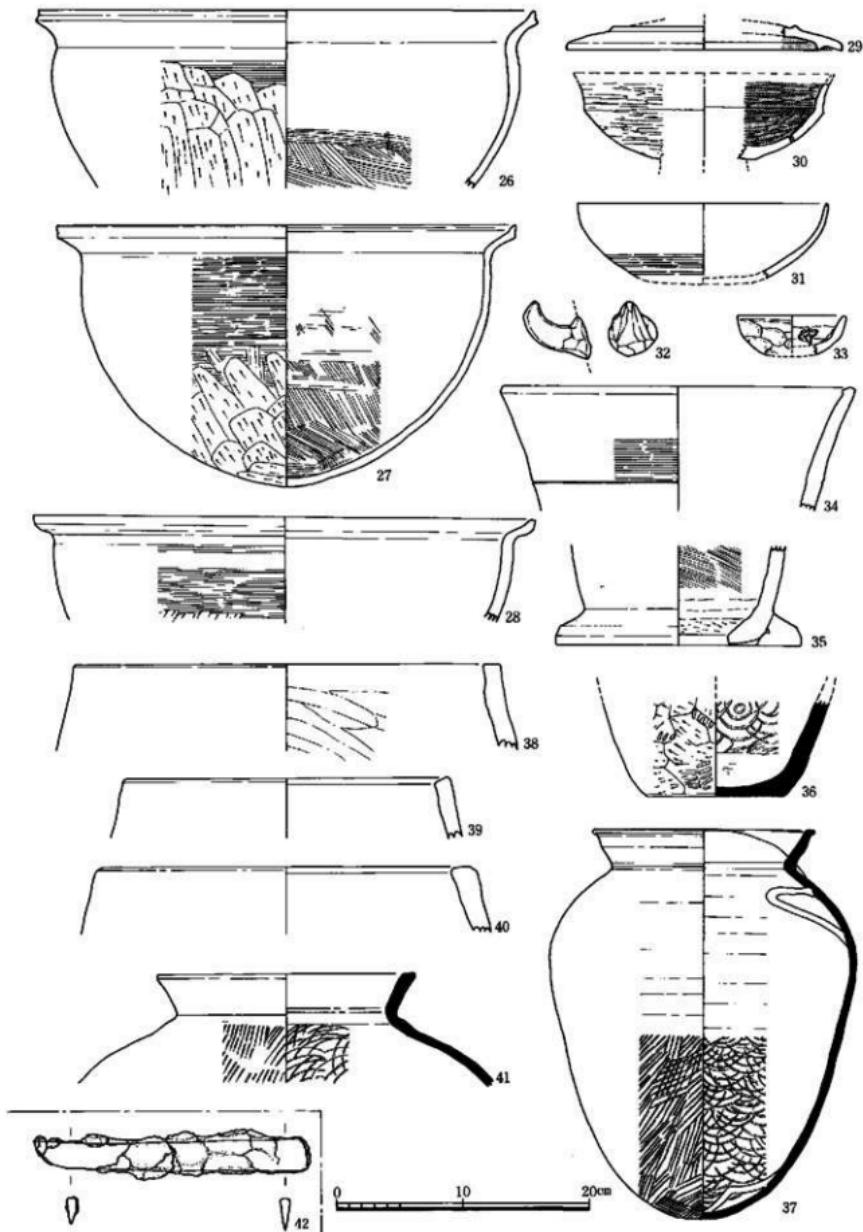
第6図 造構実測図 (1/80)



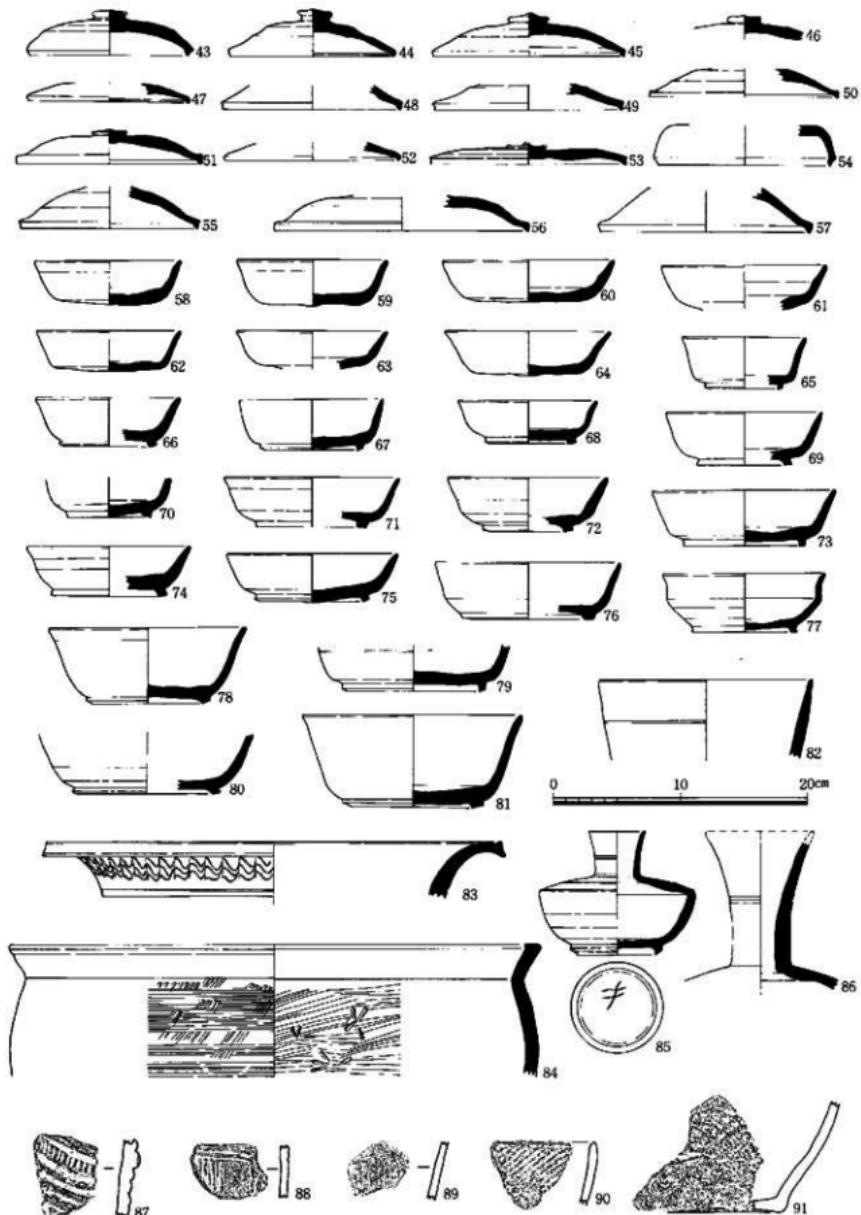
第7図 造構実測図 (1/80)



第8図 遺物実測図 (1/4)



第9図 遺物実測図 (1/4・42±1/2)



第10図 遺物実測図・土器拓影図 (1/4)

III No.19遺跡（台地部）

1 立 地

No.19遺跡は射水郡小杉町青井谷字丸山に所在する。流閉遺跡群の東端にあたり、No.18遺跡B地区の南側に位置する。遺跡はNo.18遺跡B地区との間にある谷を含み、さらに東側に拡がるものと考えられる。ここでは台地部と谷部に分け、谷部については次章に記す。遺跡は東側に張り出したやせ尾根状の台地で、両側に小谷が入り込み南側は堰止められて馬洗池となる。遺跡からは東方向に下条川を隔て南太閤山I遺跡を望むことができる。

2 遺 構

台地の緩斜面に多くの遺構が検出された。住居跡2棟、穴67、小穴に及ぶでは482個検出されている。遺構検出の状況は、20~30cm前後の耕作土を除去すると地山に達する。遺構は全てこの地山面で確認したものである。覆土及び切り合いの相違から主に黒褐色土系の覆土をもつものを先に発掘し、ここではそれを1次遺構と呼ぶことにする。そして茶褐色土系の覆土をもつものを次に発掘した。結果的には前者が古墳、奈良時代を中心とし、後者が繩文時代を中心とする遺構であることが判明した。しかし、表土層の厚さや当地が畠地であることなどを考慮すれば全てが遺構と見做し難いが、調査の過程でそれを区別することは困難であった。

また、調査行程上、当遺跡の西側半分は次年度以降の調査とし、遺構を完掘したのは第13、14回に示したとおりである。したがってここでの遺構の記載は、東側を中心に明確なものについてその概要を述べるものである。

(1) 住居跡（第11回）

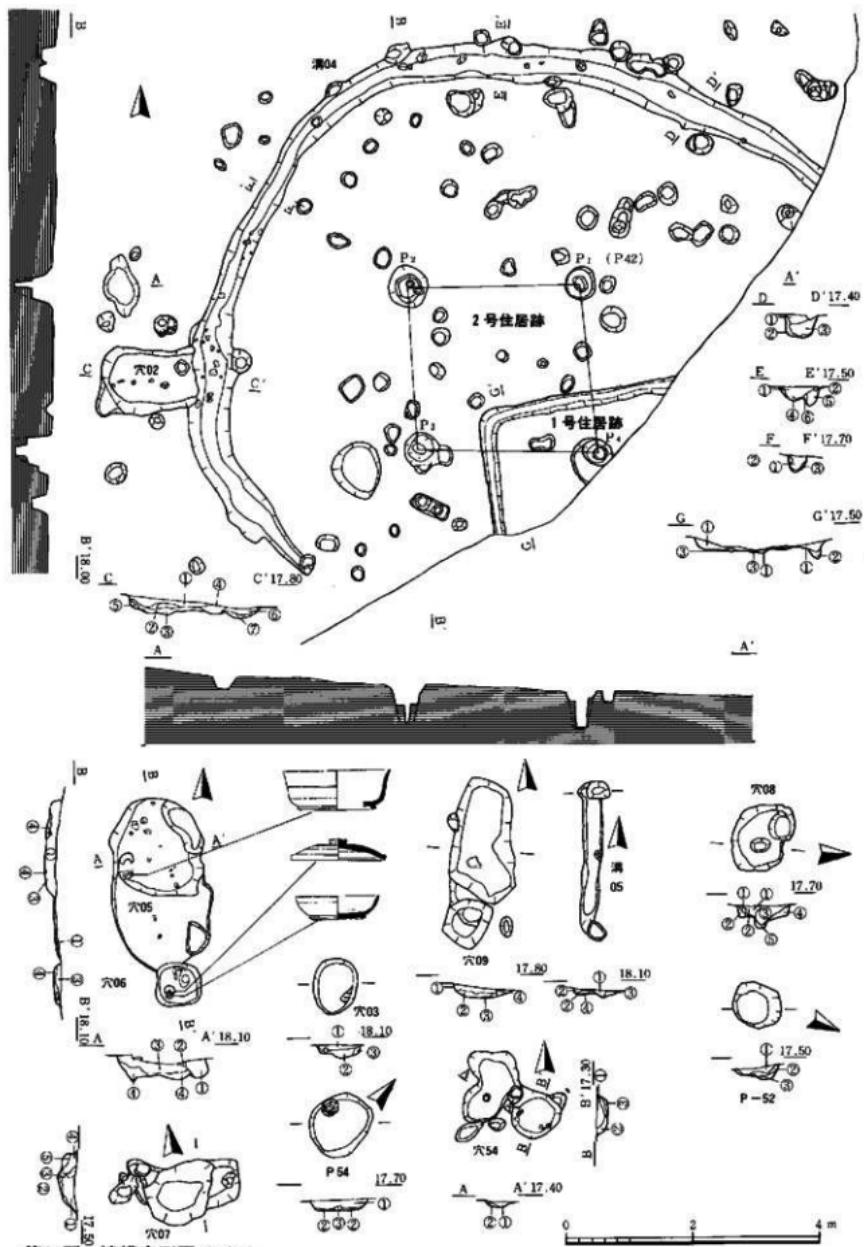
1号住居跡 調査区東端部で検出した。大半が農道下に入るため、全体の規模は不明であるが、屈曲する周溝から方形の堅穴住居跡と考えられる。床面は2号住居跡のP4を埋めて作られる。周溝及び住居跡覆土から出土した土器片から奈良時代以降と考えられる。

2号住居跡（第11回）

1号住居跡とほぼ同じ地点で検出した。直径約10mの円形の周溝の中央に4本の柱穴がある。いずれも柱痕が認められ、堅固な掘り方を持つ。掘り方は上端で径50cm前後となり、柱痕は10~20cm前後で深さは均一である。柱穴の覆土から出土した遺物は全て繩文時代であるが、周溝から、奈良時代の土器片数点と古墳時代の土器片1点出土している。したがって、この住居跡の年代を確定することは

住	①黒褐色土〔少量の炭化物及び鉄土質含む〕
01	②黒褐色土〔黄褐色の褐土質含む〕
	③黒褐色粘土〔地山土〕
六	④堅實黃褐色土〔褐色土面上に黃褐色土が少し混じる〕
	⑤堅褐色土〔地山の黄褐色土中に少し暗褐色土が混じる〕
	⑥堅褐色土〔わずかに炭化物・黄褐色土粒が混じる〕
02	⑦堅褐色土〔暗褐色土・炭化物粒をわずかに含む〕
	⑧堅褐色土〔地山土に褐色土・炭化物粒が少しある〕
六	⑨堅褐色土〔炭化物・地土を含む〕
	⑩堅黑褐色土〔多くの炭化物・地土を含む〕
03	⑪堅茶褐色土〔地山アロッカ・炭化物・鐵土を含む〕
六	⑫堅褐色土〔しままなし〕
05	⑬堅褐色土〔少し褐色土・炭化物・鐵土を含む〕
06	⑭堅褐色土〔しままなし〕
	⑮堅實褐色土〔地山の灰白色土が少し混じる〕
	⑯堅褐色土〔わずかに褐色土が混じる〕
六	⑰堅褐色土〔①のかに多く地山土・灰白色土が混じる〕
07	⑱堅褐色土〔少し暗褐色土が混じる〕
	⑲堅褐色土〔わずかに灰白色土・褐土を含む〕
	⑳堅褐色土〔炭化物粒が混じる〕
六	㉑堅褐色土〔焼土・炭化物・灰白色土を少し含む〕
	㉒堅褐色土〔炭化物・灰白色・褐色土を少し含む〕
03	㉓堅褐色土〔地山土を含む〕
08	㉔堅褐色土〔わずかに地山の灰白色土を含む〕
	㉕堅褐色土〔多く地山の灰白色土を含む〕
六	㉖堅褐色土〔わずかに地山土を含む〕
07	㉗堅褐色土〔①の上に地山の灰白色土を少し混じる〕
	㉘堅褐色土〔地山の褐色土を少し含む〕
六	㉙堅褐色土〔地山土に少しがれ色土が混じる〕
14	㉚堅褐色粘土
	㉛堅褐色砂質土〔大きなブロック〕
P	㉜堅褐色土〔わずかに鐵土・炭化物を含む〕
52	㉝堅褐色土〔黃褐色土地山アロッカを含む〕
	㉞堅褐色土
六	㉟堅褐色土
54	㉟堅褐色土〔炭化物粒混入〕
P	㉟堅褐色土
54	㉟堅褐色土〔黄褐色土地山アロッカを含む〕
	㉟堅褐色土
P	㉟堅褐色土〔わずかに鐵土・炭化物を含む〕
52	㉟堅褐色土〔黄褐色土地山アロッカを含む〕
	㉟堅褐色土
清	㉟堅褐色土
D	㉟堅褐色土〔黒褐色土中にわずかに黄褐色土が混じる〕
	㉟堅褐色土〔わずかに炭化物を含む〕
	㉟堅褐色土〔①に比べ少しよりなく、同色の土〕
04	㉟堅褐色土〔わずかに黄褐色土が混じる〕
E	㉟堅褐色土〔少し黄褐色土が混じる〕
	㉟堅實黃褐色土〔黄褐色土が少しもろく状に混じる〕
	㉟堅實白褐色土〔地山の灰白色土に少し黄褐色土が混じる〕
	㉟堅褐色土〔わずかに炭化物を含む〕
F	㉟堅褐色土〔地山土に灰褐色土が少し混じる〕
	㉟堅褐色土〔炭化物・地山・アロッカを含む〕
	㉟堅褐色土〔較の小さな地山・炭化物を多く含む〕
05	㉟堅褐色土〔較の小さな地山・炭化物をわずかに含む〕
	㉟堅褐色土〔地山土〕

表6 遺構覆土説明



第11図 遺構実測図 (1/80)

できないが、周溝出上の遺物を根拠とすれば奈良時代以降となる。しかし、当地が耕作等による擾乱を受けていることなどを考慮すれば、古墳時代に遡る可能性もある。この住居跡は多分に竪穴も想定し得るが、ここでは掘立柱建物の柱穴と考えたい。なお、1号住居跡との関係では2号住居跡の方が古い。

(2) 穴・溝 (第11図)

冒頭に記したように当遺跡は全てを完掘した訳ではなく、東側半分程度の調査にとどまっている。また、調査過程で付した穴の番号は67、小穴は482個と膨大な数である。これらの遺構はいくつかが有機的に連続して別の遺構を形成するものもあると考えられる。また、穴についてもいくつかのタイプに分類し、それらの性格にアプローチすることも必要である。しかし、ここではこれらの整理に十分な時間が獲得できなかったことや、未掘部分との関連性などから、いくつか代表的なものを取り上げる。なお穴52・54とP54は2次遺構面で検出し、それ以外は全て1次遺構面で検出したものである。

穴02 2号住居跡の周溝である溝04を切る。東側の立ち上がりは確認できなかったが、橢円形を呈する。覆土からは縄文前期の土器片が出土したが、溝04より新しい時期のものである。

穴03 90×70cm、深さ20cmの橢円形の穴である。覆土には炭化物と焼土を含み、出土した土器は全て縄文時代前期のものである。

穴05 不整円形の浅い穴である。暗褐色土の覆土上面から須恵器杯身が出土している。穴の底面には小石が多い。

穴06 ほぼ円形の穴で床面に接するように須恵器杯身と杯蓋が出土した。杯蓋が下になり杯身はその上に伏せるような状況である。身と蓋とが逆になっているために平城宮左京八条一坊三坪などで発見されている土器埋納遺構（松本他 1985）とするには根拠に欠ける。

穴07 不整円形。覆土からは縄文の破片が出土している。

穴08 不整円形。中央に柱根状の落ち込みが見られたが、周辺に柱穴状のものが見られず、性格は不明である。

穴09 2つの穴からなる。北側のものは底面で不整な橢円形となり、南側のものはほぼ円形で、北側の壁面に接して深くなる。覆土からは45点の縄文土器片が出土し、規模の割合には遺物が多くあった。なお、この地区で検出された穴の多くは、これまで述べたような不整な円形や橢円形のものが一般的である。

溝04 2号住居跡に伴う周溝である。南側ではだいに浅くなり、消滅する。

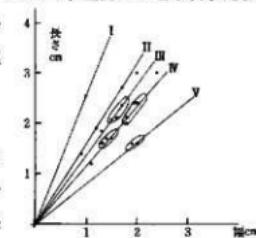
溝05 長さ2.3m、幅30cmの短いものである。性格不明。

穴54 二つの穴からなる。東側の穴の底面からは多くの縄文前期土器片と石鉋1点が出土している。

P52 径80cm位の円形。第一次遺構面に属し、覆土は地山上に似る茶褐色土で、縄文土器片がわずかに出土している。

P54 径1mの円形。遺構検出面から18cmの深さがあり、底面から縄文時代の浅鉢が出土している。著しく風化していたため、現地でバインダー処理をして取り上げた。その後の処理と復元が完了していないため図示しなかったが、この台地上では唯一の完形品である。

P92 (図版13・7) 径40cm遺構検出面からの深さ18cmの小さな穴である。覆土は黒褐色土で一次遺構面に属する。このピットから第16図70の块状耳飾が出土している。



第12図 石鉋計測図

No.	深度 cm	件数	石鉋	出土地名
1	42	3.0	2.1	安山岩
2	155	2.4	2.0	～～～
3	160	2.1	1.0	安山岩
4	49	2.4	2.0	安山岩
5	152	2.1	1.0	安山岩
6	16	2.7	1.7	ノウカ
7	48	1.6	2.0	安山岩
8	32	1.7	1.4	～～～
9	33	1.7	1.5	安山岩
10	34	1.6	1.3	安山岩
11	165	1.2	1.1	安山岩
12	162	2.0	1.0	安山岩
13	164	1.9	1.3	～～～
14	59	2.6	1.0	安山岩
15	163	2.1	1.6	安山岩
16	45	2.0	2.0	安山岩
17	44	2.4	1.7	安山岩
18	45	2.4	2.0	安山岩
19	56	1.9	1.0	安山岩
20	51	1.6	1.9	安山岩
21	36	1.42	1.5	安山岩
22	47	2.1	1.5	安山岩
23	37	1.4	0.9	安山岩

表7 No.19遺跡石鉋計測表

3 遺 物

台地部から出土した遺物は旧石器時代、縄文時代（第15図28・29）、古墳時代、奈良時代、そして現代に及ぶ。旧石器時代石器1点と近世以降の陶磁器については、その量において主体を占める谷部の項に記した。

(1) 縄文時代

a 土器（第15図1～27）

前期後半（1～21） 施文を中心にVI類に分ける。

I類（1・2・4） 無文地に粘土紐を貼付し、細隆起線をつくった土器である。1は鉢の肩の部分と思われるもので体部下半には細い半截竹管状による幾何学的な文様が描かれる。施文が浅く、2条の沈線状となる。

II類（3・5～9） 縄文地に粘土紐を貼り付け、I類よりも太い隆起線を持つものである。3は上器片を再加工した有孔円板土製品である。9は口縁部で細い粘土紐を直交して貼り付けたものである。

III類（11） 無文地に粘土紐を貼り付けその上をヘラ状工具で軽く削むものである。器壁は薄い。

IV類（10・12・13・16・17） 器面に細い粘土紐を貼り付け、半截竹管などにより連続爪形文を施すものでいわゆる浮隆爪形文と言われるものである。モチーフは山形にするもの弧を描くものそして幾何学的に構成するものなど多様である。この遺跡では主流を占める一群である。17は浮隆爪形文の下にL Rの縄文が続く。

V類（14） 細い半截竹管状のものにより連続隆起文を施すものである。

VI類（15・18～21） 羽状縄文（R L, L R）の一群である。19は口縁部であり、縄文のみが施されるものと考えられるが、その他についてはIV、V類と組み合う可能性がある。

縄文中期（22～27）

半截竹管などによる隆起を文様構成の基調とするもの（22～25）で、中期中葉に含まれる。26・27は縄文地に浅い沈線が施される。両者とも穴19から出土し、同一個体と考えられる。27は口縁部から弧状に沈線が下がり、そのまま左側へ平行に引く。このような土器は管見では知らないが、ひとまずこの項に入れた。

b 石器（第16・17図）

石鎌、石錐、石匙、磨製石斧、石皿、磨石、凹石、筋砥石があり、装飾品として玉、块状耳飾などがある。成品と見做し得るのは全て図示した。なお、打製石斧の出土は1点もなかった。65は不明品としておく。

石鎌（42～57）・（表7参照） 50を除いた他は、全て無茎のものである。形状、大きさにばらつきが見られる。第12図に示したのは長幅比であり、5つに分類した。I類からV類へ移向するに従い鈍角になることを意味し、それぞれの類の中でいくつかのまとまりが見られる。石質は安山岩のものが多い。

石錐（58・59） 58は比較的厚い剥片を素材とし、先端部断面を菱形に作る。安山岩製。59は先端部を欠く。先端部断面は楕円形となる。石質は凝灰岩。

石匙（60～63） 62のメノウ型を除いて全て安山岩製である。63は刃部両端を丸くし、つまみを明確に作り出す。

磨製石斧（72～86） 小型のもの（72～77）と中型のもの（78～82・84～86）そして大型の83がある。総数15点のうち6点が折損しており、中型と大型のものに多く見られる。大きさの違いはそれぞれの用途の違いを意味するものであろうから、小型品の多いことはこの遺跡を考える意味で興味深い。刃縁に使用痕が認められるものに73・74・75・79・80・84があり、76と81は使用のため刃縁が潰れている。76は刃部の再加工が見られる。84が安山岩で他の全ては蛇紋岩製である。磨り切り技法によるものは認められない。

石皿（88） 破片である。中央が凹み砥石の可能性もある。加熱により表面が黒化している。砂岩製。

磨石（89） 敲石としても使われたようである。こぶし人の縁辺3箇所に敲打痕が見られ、平らな部分に磨り痕を認める。一個面に数回の剥離が見られるのは、折損部の補修と考えられる。花崗岩製。

凹石 (90) こぶし大の平らな部分に凹みがある。両側邊に敲打痕が見られる。花崗岩製。

玉 (64)・珠状耳飾 (66~71) 玉は滑石製で垂玉の一種と考えられる。珠状耳飾は70以外は全て滑石製である。破損品が多く、再度孔を穿ち乘玉として利用される。いずれも前期後半のものと考えられる。

(2) 古墳時代 (第15図28・29)

土師器高杯(28)と須恵器杯身(29)がある。29は内外面ロクロナデ調整。底部底面ヘラ切り。7世紀初頭と考える。
(関 清)

(3) 奈良時代 (第15図31~40)

丘陵部出土の奈良時代の遺物には、杯B蓋(31~34)、杯B(35~39)、鉢(40)、円面鏡(30)などが少量ある。出土場所は31・37・39が穴06覆土、34がP 221覆土、他は1~2層出土である。

杯B蓋 口径14.8~18cmのものがある。平坦な頂部から傾斜して縁部にのび、縁部近くで、傾斜度を変えるものが多い。31の頂部外面はヘラ切り、ロクロナデ調整。つまみの最大径は2.9cmを測り、中央部がわずかに高くなる。内面の調整は中央部までロクロナデを施す。32の頂部外面は右まわりのロクロ削りを施し、内面は指先による仕上ナデ調整。34の内面調整は中心部までロクロナデ。

杯B 口径12.2~16.8cmのものがある。高台は低く、ふんばったもので、外端部がわずかにあがる。底部外面はヘラ切り、高台貼り付け後ロクロナデを施したものが多い。36・37の内面は、一方向のナデ調整。37の口縁部外面に一条の沈線がめぐる。

鉢 焼成不良の破片で体部外面に一条の沈線がめぐる。内外面カキ目調整。

円面鏡 鏡部破片。端部が突き気味の外端をもち、二条に凹められた海より陸がわずかに高くなる。(池野正男)

(4) 相輪 (第18図・写真21)

相輪はX 6 Y 7区を中心に約10m程の凹内から約60点の破片が、須恵器・土師器と共に出土した(遺構は未掘)。

九輪 (91~94) 九輪は帯状の覆輪と厚さ1.5cm程のドーナツ状の円板を組み合わせた形態である。覆輪断面の接合面の状態から成形は、円筒状のものを作り、次いで底板(円板)にタタキ調整を加え中央に穴を開ける。また円筒部の短い一方を接合し覆輪を形作り、入念にロクロナデを加えている。色調は1が青灰色で、2~4が淡褐色である。大きさは、91が下部径37cm、高さ5.2cmあり、92が下部径46.0cm、高さ8.8cmある。93の径は46.4cm、高さ7.8cmで中央の内径が15.2cmである。4は下部径46cmで高さ7.3cmあり、径37cmと径46cm程の二種類が存在する。2・3の下端には直径4mmの小さな穴を貫通させるが、全体の穴数は明らかでない。また94の外面上には先の鋭い「三」の線刻がみられる。

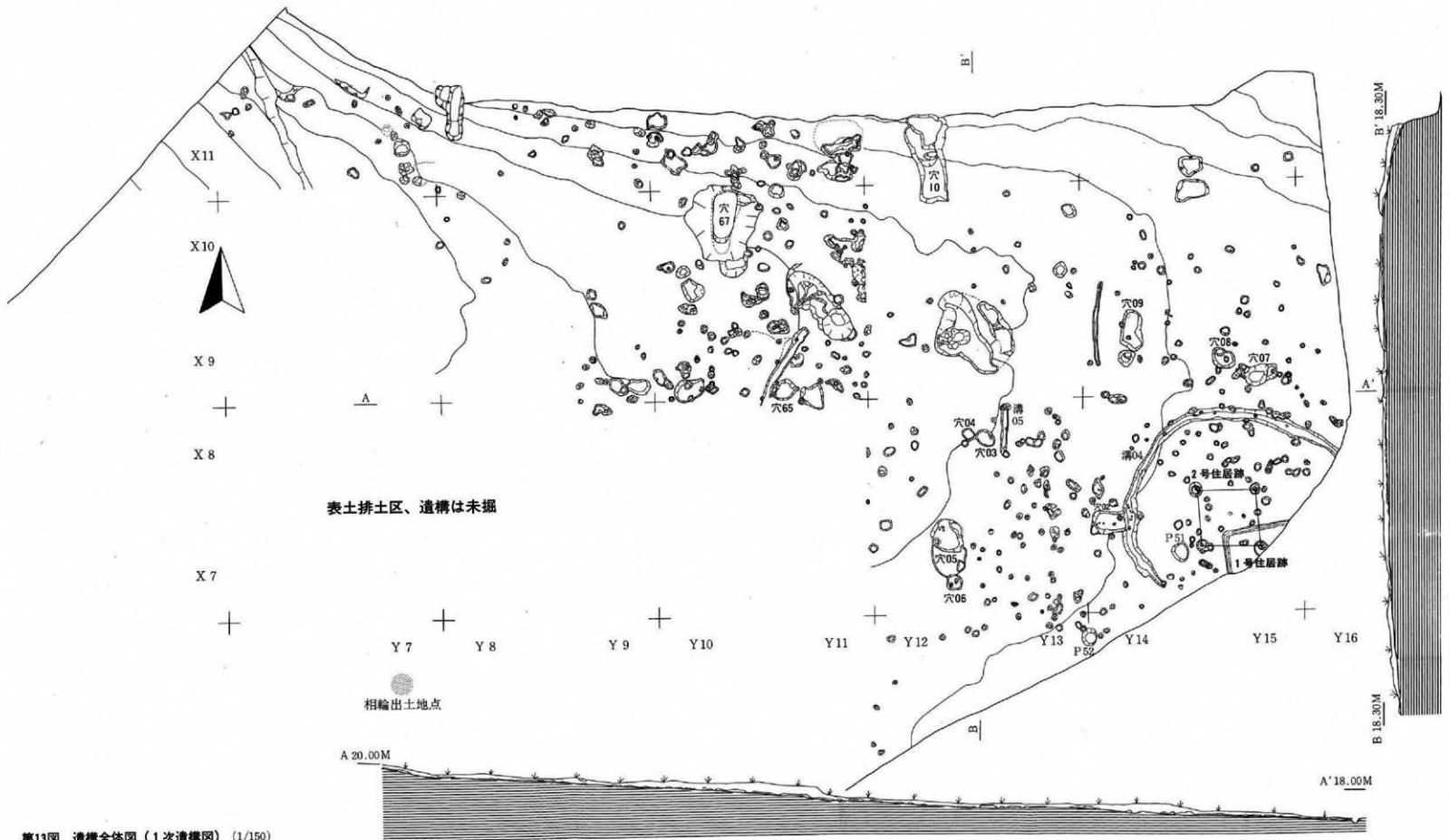
擦管 (95~97) 95は赤褐色の色調で円筒状の形態をなし、外面にタタキ痕を残し他をロクロナデする。外径16cmの大きさで上段は有段となり立ち上がる。96は下端の内外面をヘラケズリし、下端面は角ぼった平面となる。6は小破片で径・傾きが不正確であるが、同形態のものとして図示した。

伏鉢 (111) 111は下部内径が21cmで、内面下端をヘラケズリする他はロクロナデする。体部はふくらみをもち上方でくびれる。上端を欠いているが、100のように大きく外反すると思われる。100のくびれ内面はヘラケズリする。

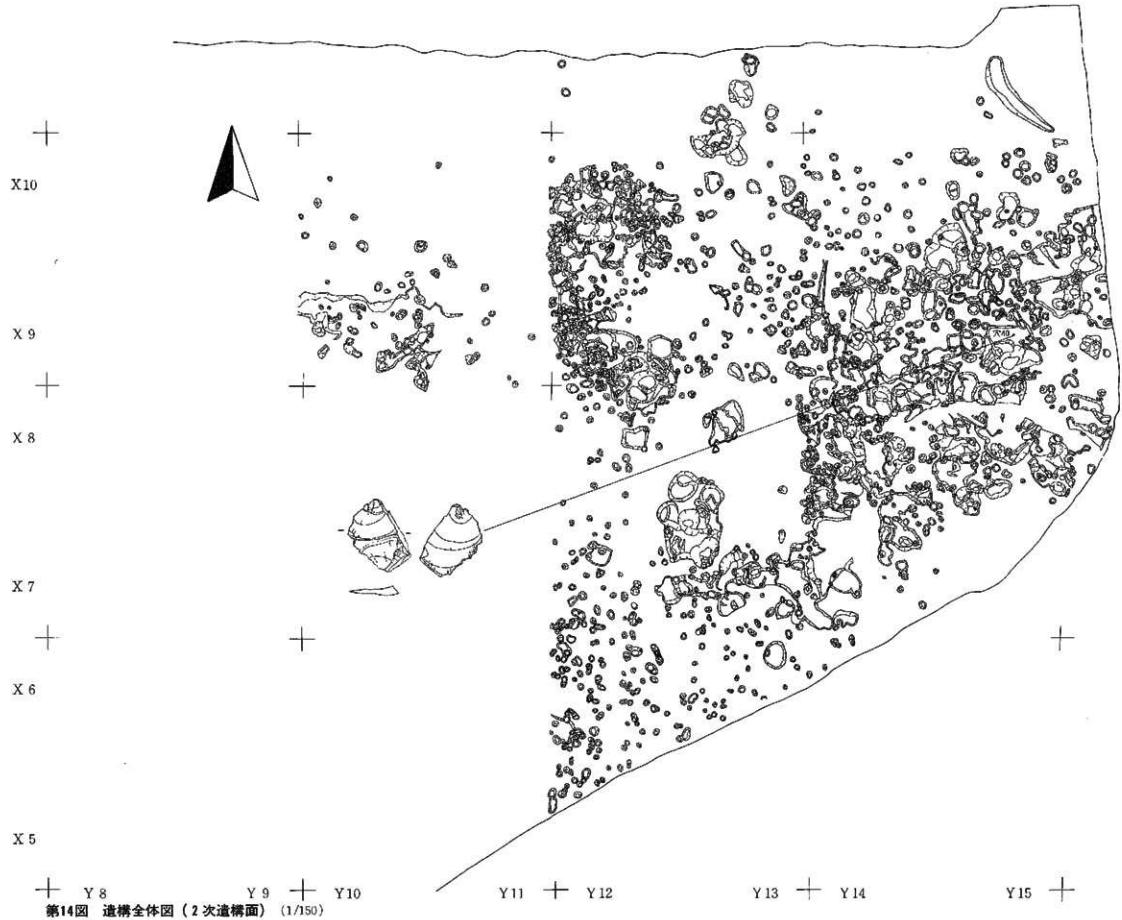
その他 99は灰色の色調で、四角形隅部片である。内径より復元した一辺の長さは25cmを有し、内径15.5cmである。表面は平坦で細かいヘラケズリ後ナデ調整を行う。隅を結ぶ対角線上に径4mm、深さ数mmの小穴が斜めに付けられる。表面には内径近くをヘラケズリし、周囲には幅3cm程の四角形の剥離した接合面がめぐる。

98は一面にタタキ痕を残した青灰色の破片で、他方の平坦面をナデ調整し、ヘラ先による線刻五条を引く。112は淡褐色の色調をした土師質の土錐状のものである。長さ4.1cmで、両端に径4mmの穴を開ける。重さ約11g。なお、

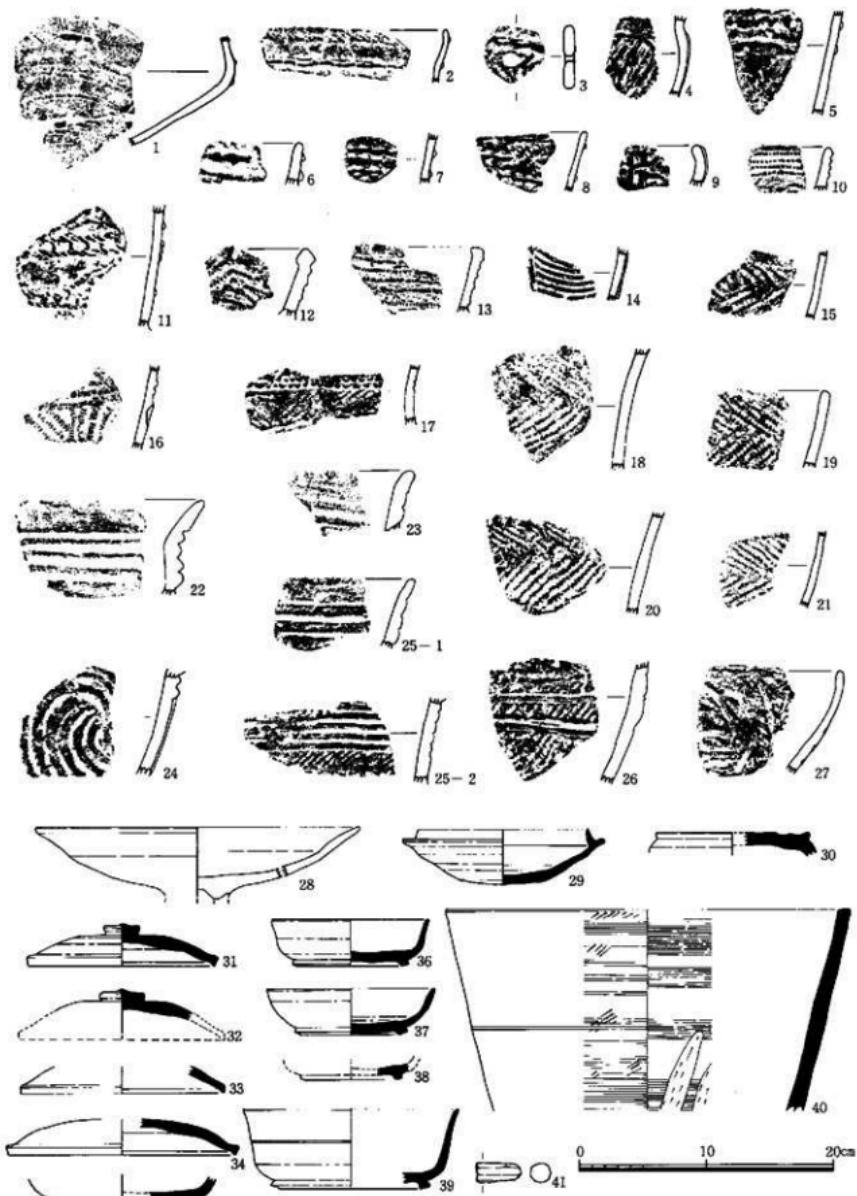
99は奈良県崇禪寺東塔の受花のかわりに付けた平頭と呼ばれるものが参考となる(浜島1984)が明確でない。(上野 章)



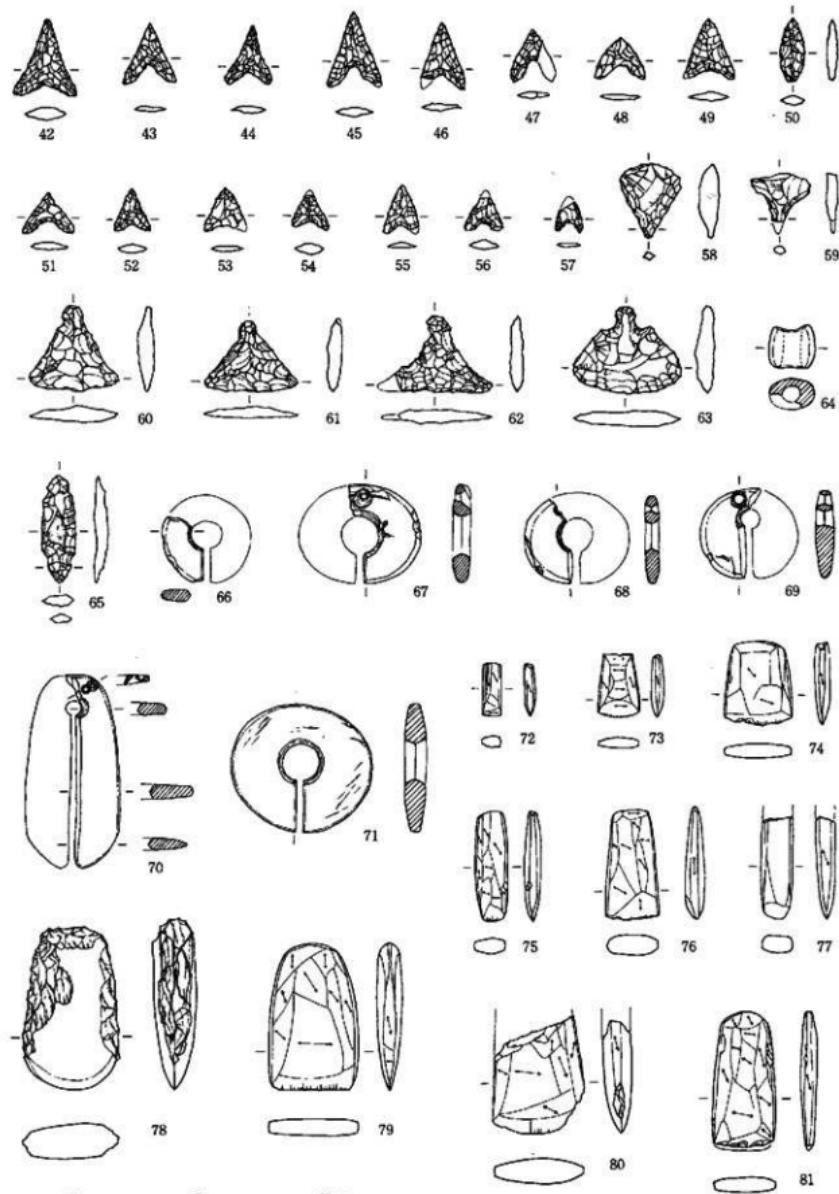
第13図 造構全体図（1次造構図）(1/150)



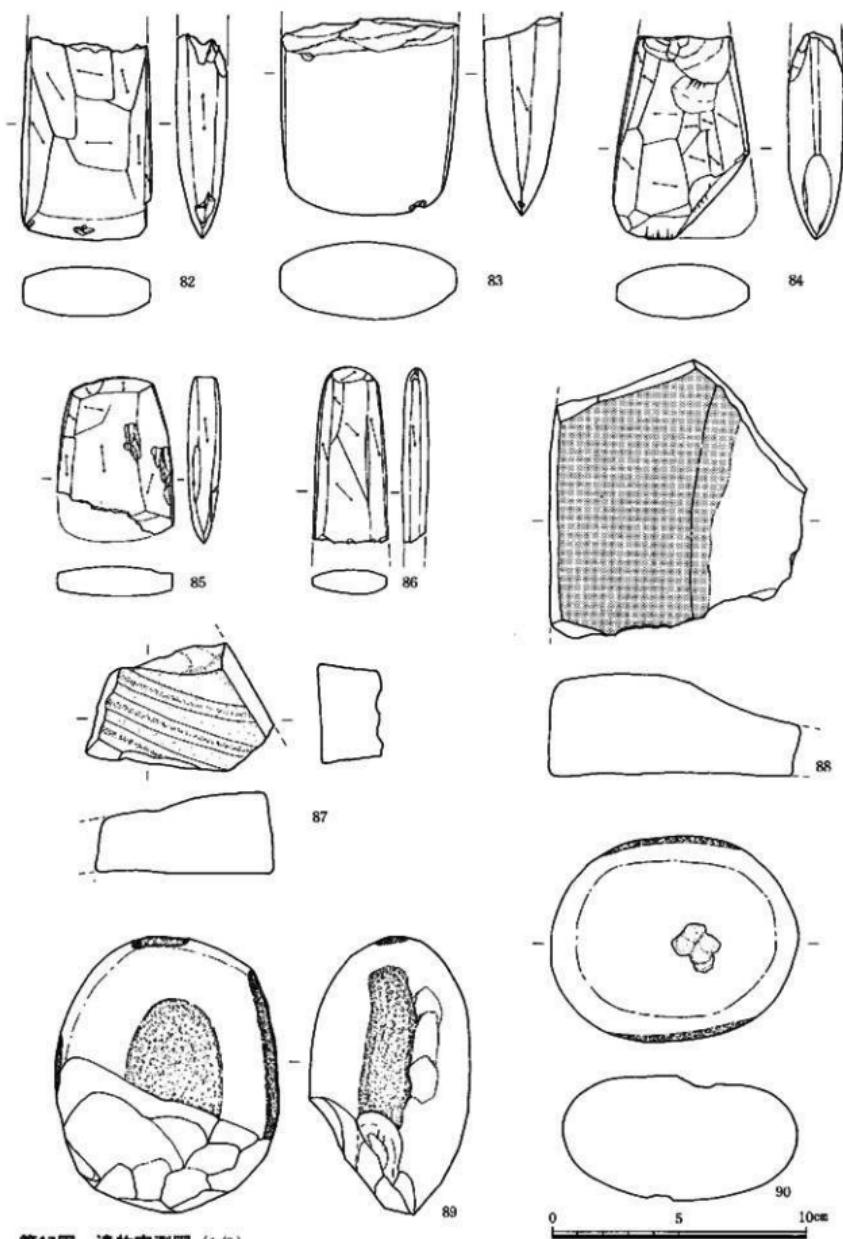
第14図 遺構全体図 (2次遺構面) (1/150)



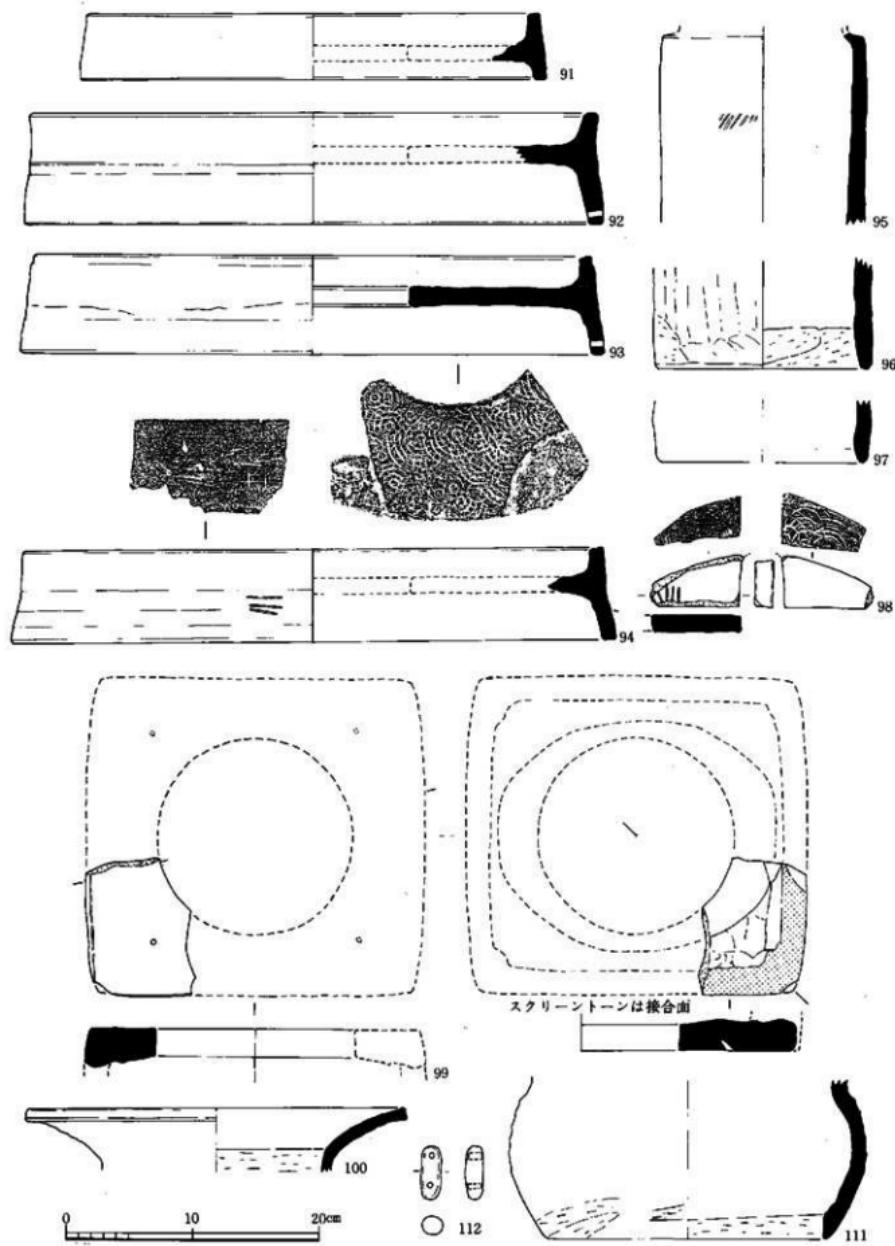
第15図 遺物実測図 (1/4)・土器拓影図 (1/3)



第16図 造物実測図 (1/2)



第17図 遺物実測図 (1/2)



第18図 遺物実測図 (1/4)

IV No.19遺跡(谷部)

1 層序と遺構

(1) 層序

No.19遺跡谷部の集水域は狭く、200m程谷をつめると尾根になる。したがって、現在のような地形になるまではかなりの時間を要したであろうことは容易に理解できる。調査区のほぼ中央部での層序は第19図に示したとおり自然堆積の状況を示す。谷の基底は礫層であり、すくなくとも50cm以上の厚さを持つことをトレンドで確認している。この礫層は第四系洪積層の日ノ宮瓦層と考えられ、開析がこの礫層にまで及んだことを意味する。

遺物は谷の基底面の上に堆積したⅢ層とⅣ層から出土する。また、Ⅲ層では多くの植物遺体が出土し、凹地では特に多く見られた。遺物は旧石器時代から縄文時代晩期まで混在しており、土器は摩滅しているものが多い。このことはすくなくとも縄文晩期以降に谷の埋没が進行したことを意味する。なお、Ⅶ層の灰褐色砂質土は、堆積物でありながら開析の際に残ったものと思われ、これと同様の土は、対岸の南太閤山I遺跡で確認された川跡形成面の地山の堆積物と同様のものである。

IV層～V層は無遺物層であり、V・VI層は粘性の強い土である。I～III層は耕作土で3枚の水田基盤面が確認された。これは台地縁辺部を削り、は場の拡大の結果形成されたもので、元の土地所有者の話からも裏付けられる。これらの層からは奈良時代から現代に至る遺物が出土する。したがって奈良時代にはIV層上面まで谷の埋没が進んでいたことを示す。最上面には黄土色が5～10cmの厚さで堆積するが、これは流路造成に伴う客土の流入である。

VII・VIII層の遺物の出土状況を見ると、縄文前期の遺物は東側に多く、中期以降のものは西側に多い傾向を示す。これは台地部での遺物の在り方と合致することと、周辺に該期の遺跡が存在していないことから、台地部の遺物が谷部へ流れ込んだものと解される。

(2) 遺構

3箇所で溝が検出された。いずれも谷部の肩にあたり、谷筋と平行である。

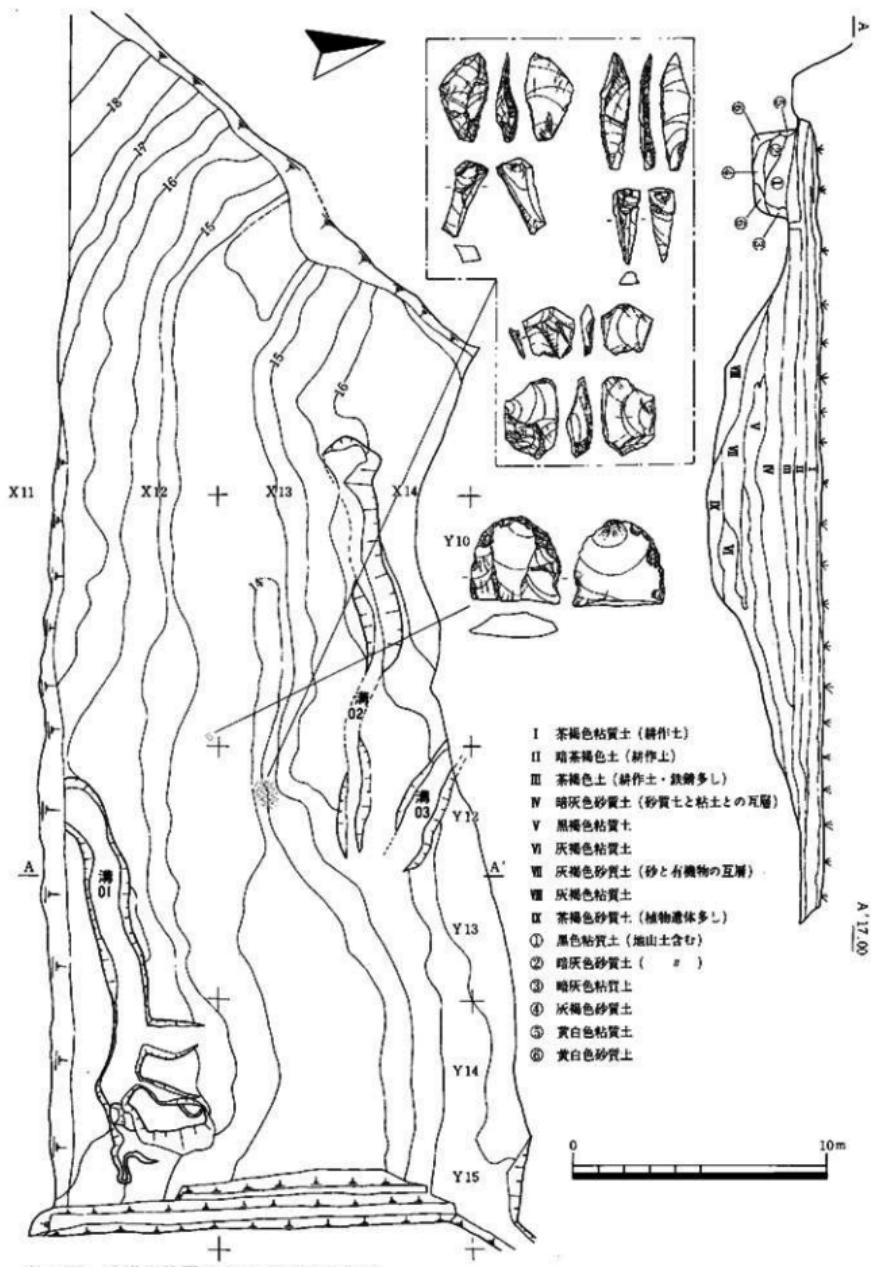
溝01 長さ6m、幅70cm、深さ35cmの規模をもつ底面は平らになり、東側で谷方向へ2箇所に溝が切られる。東端は調査区内で止まり、谷方向に屈曲し消滅している。西端部は南にカーブし台地に入る。台地部で検出した長楕円形の穴10は、ちょうどどこかの真上に位置し、関連性が窺える。覆土は上面で黒色の粘質土が入り、下面では灰褐色砂質土となる。全体的に地山土の混入が見られるのが特徴である。遺物は奈良時代の須恵器片数点出土したのみでいずれも黒色粘質土中からである。したがって当遺構は奈良時代以降のものと言えるが、遺物の在り方が地山土同様、混入の状況を呈していることから、かなり年代が下ることも考えられる。

この溝は最初の水田面が形成される以前に存在していたものであることは確かであり、水田の拡張の際に埋められたものと解される。

溝02 浅い凹状の溝である。谷筋に沿っており、確認した長さは6.5mである。立ち上がりがなく、テラス状になる所もある。

溝03 溝02同様浅い溝である。No.18遺跡B地区の方向に伸びるが、途中で消滅する。このような遺構の例としては上野赤坂Aや東山II遺跡でも確認されており、それぞれ山道跡、水路跡などの性格が与えられている。当遺跡の場合、溝01は用排水路と考えられるが、溝02・03については、その性格を断定し得るものがない。また、溝01以外には出土遺物もなく、年代の決め手を欠く。しかし、いずれも谷部が水田化される以前のものであることは確かであり、その水田化がいつの時代かは明確ではない。地元の方の話では明治初年とも言われる。

(関清)



第19図 遺構全体図 (1/200、断面図は1/100)

2 遺 物

(1) 旧石器時代

旧石器時代の石器は合計14点が出土した（第20図・表8）。これらは検出した位置から大きく2群にまとめることができる。ひとつのまとまりは谷部のX13Y12区にあり（第19図）、他のひとつは南側台地部に群集する穴群の覆土から出土した石器で構成される。前者は谷地形の基底部で第Ⅱ層に出土層位をもつ。本来は南側の台地部に原位置を求めるうと考える。

1は長さ4.6cm、幅1.1cmをはかるナイフ形石器である。二次加工は右辺すべてと左辺の約半分に施されており、左辺上部に直線的な刃部を残す。プランティングはほぼ垂直に腹面からなされ、左辺ではわずかながら背面からもなされている。打点は除去されておらず、平坦面が残っている。背面は大きく3面で構成され、腹面と同方向及び左右両方向からの剥離面となっている。

2は長さ3.5cm、幅1.9cmをはかるナイフ形石器である。二次加工は1と同様に右辺すべてと左辺の約半分に施されている。左辺の末端部に直線的な刃部をもつが、素材に対して斜めになっている。背面は6面で構成されており、5面がおおむね腹面と同じ剥離方向を示す。末端部の一面のみが反対方向からの剥離面である。やはり打面は除去されておらず、平坦面が残っている。

3は比較的厚みのある継長剣片を素材とし、その末端部側を折りとった折断調整石器である。折断は背面から加撃されている。折断の後、側辺の一部に背面と腹面の両方向から、部分的な小剥離が行われている。図の上部に鋭い縁辺を残している。打面は平坦な一枚の面である。

4は3と対称的に、かなり薄い剣片の両端を折りとった折断調整石器である。いずれも背面からの加撃によって折断されている。結果として、五角形の形状を示す。相対する両側縁に鋭い縁辺を残している。図の右側折断部の下位に、腹面からの微細な二次加工を観察できる。背面の剥離方向に一定の規則性を窺うことはできない。この素材自体は小さな継長剣片と考えられる。

5と6は長さ約3cmをはかる小さな継長剣片である。いずれも平坦な一枚の打面をもつ。背面はおおむね腹面と同一の剥離方向を示す。6の背面に存在する小剥離は頭部調整痕と判断することができる。

以上の石器はまとまりをもって出土したが、これより約3m南東の地点で7の石器が出土した。この遺跡では唯一打面に調整を観察できる石器である。推定で長さ5cm以上となる比較的大きな継長剣片で、背面構成は腹面と同方向の剥離面3枚から成る。右側辺には腹面からの、左側面には背面からの小剥離が並ぶが、連続性は認められない。なお、末端部の折断は腹面からの加撃による。

台地部から検出した石器はほとんどが3cm未満の小さな剣片か微細な破片である。14は点状の打面をもち、背面には腹面と反対方向の剥離面もある。

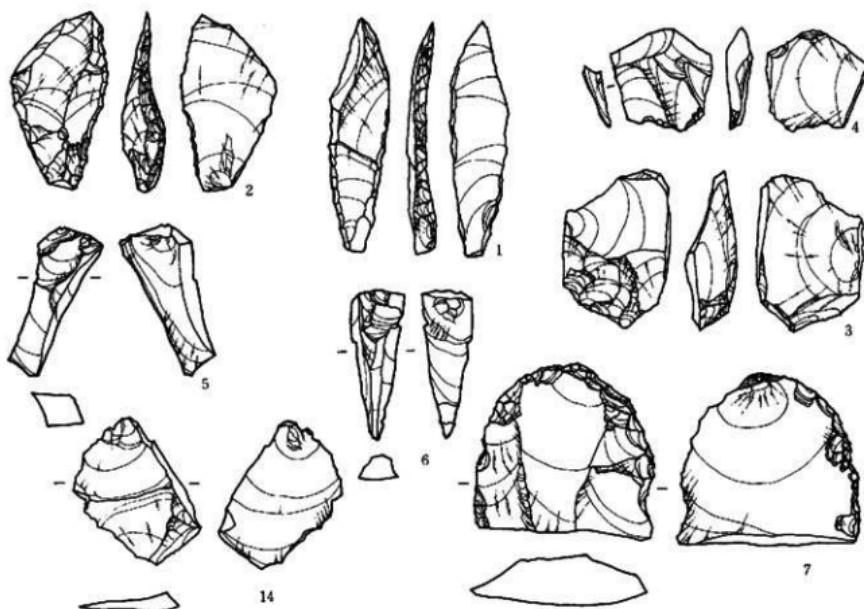
これらの石器はいずれも濃飛流紋岩を石材とするが谷部と台地部では母岩を逸している。谷部の石器は青灰色を呈しており、台地部の石器は灰白色を呈するものが多い。技術基盤ではまず二次加工技術において2点のナイフ形石器はきわめて類似した属性を保持する。剣片剥離技術は資料数が少ないので全容を窺い知ることはできないが、平坦打面からの剥離と頻度の高い打面転移を指摘できる。目的剣片はかなり継長が志向されているものの、二次加工技術と折断技術の介入によって、素材の形状は大きく変化している。

このような技術的特徴をもつ石器群は現在のところ、富山県内に類例を見出すことは難しい。石材と目的剣片の形状からは、東北地方に広く分布する石刃石器群に該当させることも可能である。しかし、平坦打面を残し両側縁のかなりの部位に二次加工を施すナイフ形石器の抽出はやはり難しい。二側縁加工という属性は関東地方のいわゆる茂呂

型ナイフ形石器の特徴であるが、打面の残存において異なりを示す。

ところで富山平野には、「立野ヶ原型ナイフ形石器」や「ウワダイラ型台形石器」と呼称される小型ナイフ形石器を代表とした石器群が存在する。この石器群の一部には広義の二側縁加工のナイフ形石器も含まれており、剥片剥離技術の類似性なども考慮すれば、大きくはこの石器群の一部もしくは発展形態の一派として位置づけられる蓋然性があることを指摘しておく。

(松島吉信)



第20図 造物実測図 (1/1)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	打面	石材	出土区	その他の
1	ナイフ形石器	4.6	1.1	0.5	平坦 縫合流紋岩		X13Y12	
2	ナイフ形石器	3.5	1.9	0.9	平坦	〃	〃	
3	折断調整石器	3.1	2.1	1.0	平坦	〃	〃	
4	折断調整石器	2.0	2.0	0.5	—	〃	〃	
5	剥片	2.9	2.1	0.7	平坦	〃	〃	
6	剥片	2.9	1.0	0.6	平坦	〃	〃	
7	剥片	3.5	3.5	0.8	震整	〃	X12Y11	端部は腹面から折断
8	紛片	1.9	1.5	0.3	—	〃	X9Y10	
9	紛片	2.2	1.7	0.7	平坦	〃	X11~12Y11~12	
10	紛片	2.5	1.0	0.7	—	〃	穴-03	
11	剥片	1.9	2.6	0.9	—	〃	穴-16	
12	剥片	3.2	1.8	1.5	—	〃	穴-23	周側刃は背面から折断
13	紛片	1.1	0.8	0.1	—	〃	穴-24	
14	剥片	2.9	2.4	0.4	点	〃	穴-40	背面に自然面あり

表8 流団No.19遺跡石器計測表

(2) 繩文時代 (第21~23図)

a 土器 (112~157) 前期から晩期まである。中期から晩期にかけての土器は谷部斜面で多く検出しており、全体的には前期の土器が主体を占める。これらの遺物は前章の台地部からの流れ込みと考えられる。

前期後半 (113~137) 台地部の分類に準拠する。

I類 (119) 無文地に粘土紐を貼り付けるものである。横位に貼付した粘土紐から弧状に粘土紐を上から貼付し、このモチーフが輻にくり返し施される。

II類 (113・114・115・117・120~122・124・125) 繩文地に粘土紐を貼り付ける一群である。113は粘土紐の上から刺突が行われる。124は口縁部に近い部位のもので横位の隆起線から広い間隔で弧状に隆起線を施す。

III類 (115・119) 無文地に粘土紐を貼りしその上からヘラ状工具のようなもので刻むものである。116では口縁部にも粘土紐を1cm間隔で貼り付ける。口縁端部内側に稜を作る。

VI類 (123・127~132・134~137) 器面に細い粘土紐を貼付し、半截竹管などにより連続爪形文を示す一群である。いわゆる浮隆爪形文でこの類が最も多く見られる。136は下半にR.Lの繩文が見られ、おそらくはその下にL.Rの繩文と接合し羽状繩文が施されると考える。

V類 (133) 細い半截竹管状のものにより連続隆起線文が施されるものである。

VI類 (126) ヘラ状の工具で粘土を抉り取り鋸歯状の文様を描くものである。口縁部も同様の工具で取り除かれ小突起状に作る。口縁部には折り返しが見られる。鋸歯状文の下には平行な隆起線文が数本施される。

中期中葉 (138~144) 半截竹管による隆起帶を文様構成の基調とし、爪形文を施したり(138)ヘラ状工具で刻むものである。138は波状口縁の鉢で、140は平縁の深鉢になると思われる。

後期後半 (146・149・156・157) 146と147は同一個体と思われるもので、口縁部に平行に引かれた沈線を弧線で切り、その区間の繩文を交互に磨り消す平縁の深鉢である。148は口縁部にR.L右下がりの繩文を施し、口縁に平行な2本の沈線の間を直線で切り、その間の繩文を磨り消す平縁の深鉢である。149は外面に繩文を施し内側に刺突と沈線を施す。156は口縁部の繩文を磨り消すものである。

晩期 (150~155) 150は口縁部まで繩文を施し、端部を連続して押さええる。153・154は条族文土器で153の口縁部は連続して押さえられ、小波状となる。154の底部には網代痕があり、荒木氏の分類〔荒木 1970〕によれば「2本越え、2本潜り、1本送り」となる。155は無文の浅鉢である。これらは下野式に一括される。

b 石器 (第23図) 成品と見做し得る全てを図示した。石鎚・磨製石斧・打製石斧・石皿・敲石がある。個々の遺物の説明を省き、特筆すべきものについて記す。なお、石鎚については表7を参照して頂きたい。

谷部の石器で注目されるのは打製石斧の存在である。台地部では1点も発見されなかったものが谷部では3点発見されている。おそらくは中期以降の土器に共伴するものと考えられる。また175の石斧は断面長方形を呈し余り類を見ない。刃部刃縁には使用痕が認められる。

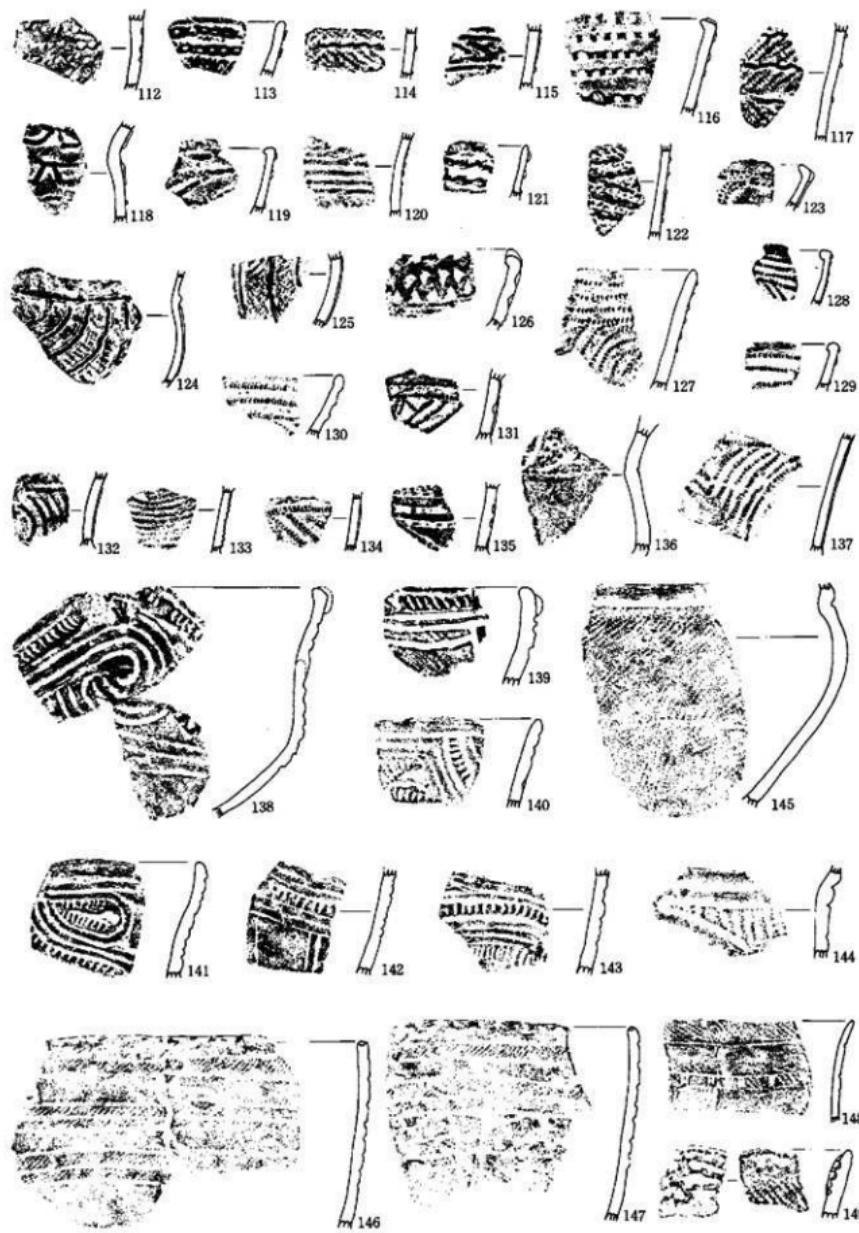
(周清)

(3) 奈良時代 (第22図158、第24図183~105)

谷部出土の奈良時代の遺物には、杯B蓋(183)、杯A(190・191)、杯B(192~198)、長頸壺(105)、横瓶(100)、甕(103・104)、特殊品(101・102)、黒色土器(199)などがある。

杯B蓋 口径14.0~18.8cmのものがある。平坦な頂部から傾斜してスムーズに縁部に至るものが多く、頂部外面は全て右まわりのロクロ削りが施される。頂部内面調整は不定方向のナデ(183・186・189)、指先による仕上げナデ(184)などがある。つまみの最大径は2.8~4.0cmを測り188は大形である。

杯A 口径12.8~13.6cm、高さ3.6~3.8cmを測り、平底気味、丸底気味のものがある。底部外面はヘラ切り、軽いナデ仕上げ調整。内面は中心部までロクロナデを施す。



第21図 土器拓影図 (1/3)

杯B 全体を知りえるものは少ない。口径13.8~14.2cm、高さ4.0~4.7cm。高台の形態は、低くふんぱり、外端部が上がるるもの(194・197・198)が多く、高くて細いもの(193)もある。底部外面はヘラ切り、高台貼り付け後ロクロナデしたものが多く、内面調整は中心部までロクロナデを施す。

横瓶 口縁部破片。口径11.5cmを測り、外面に「X」状のヘラ記号が認められる。

長頸壺 体部破片。高台は外端部があがり、先端は細く内傾してのびる。体部下半外面にロクロ削りを施す。

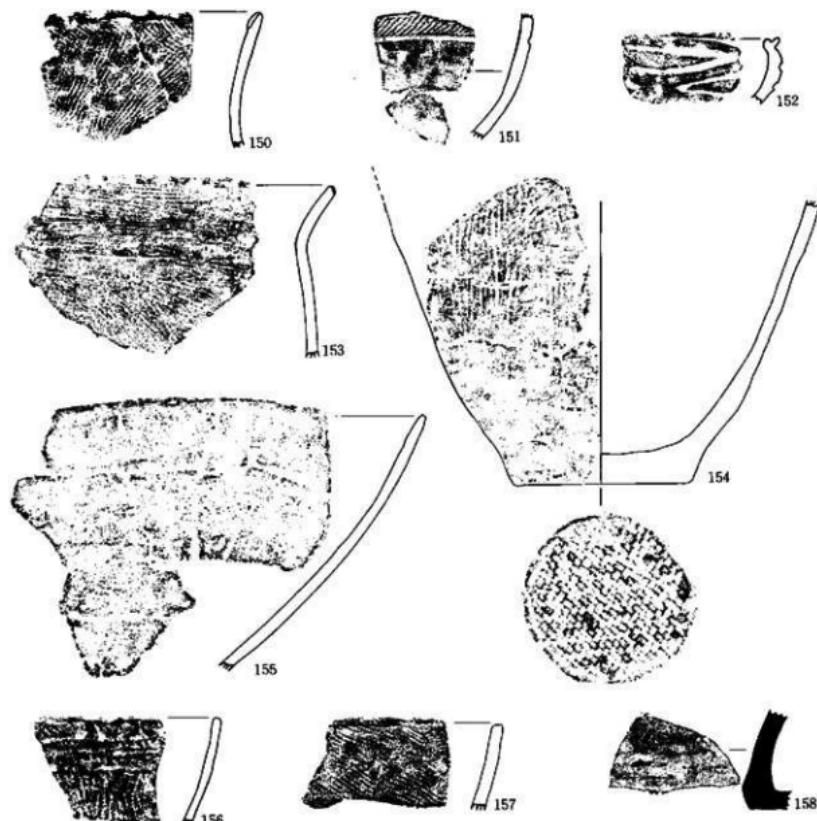
甕 104の体部肩に1対の環状把手が付く。口縁部は短く外傾して途中に沈線がめぐる。口径26.9cm。

特殊品 厚みのある焼成不良品。101は脚状を呈し途中に突帯を設ける。102は鉢状を呈し、体部外面に二条の沈線がめぐる。

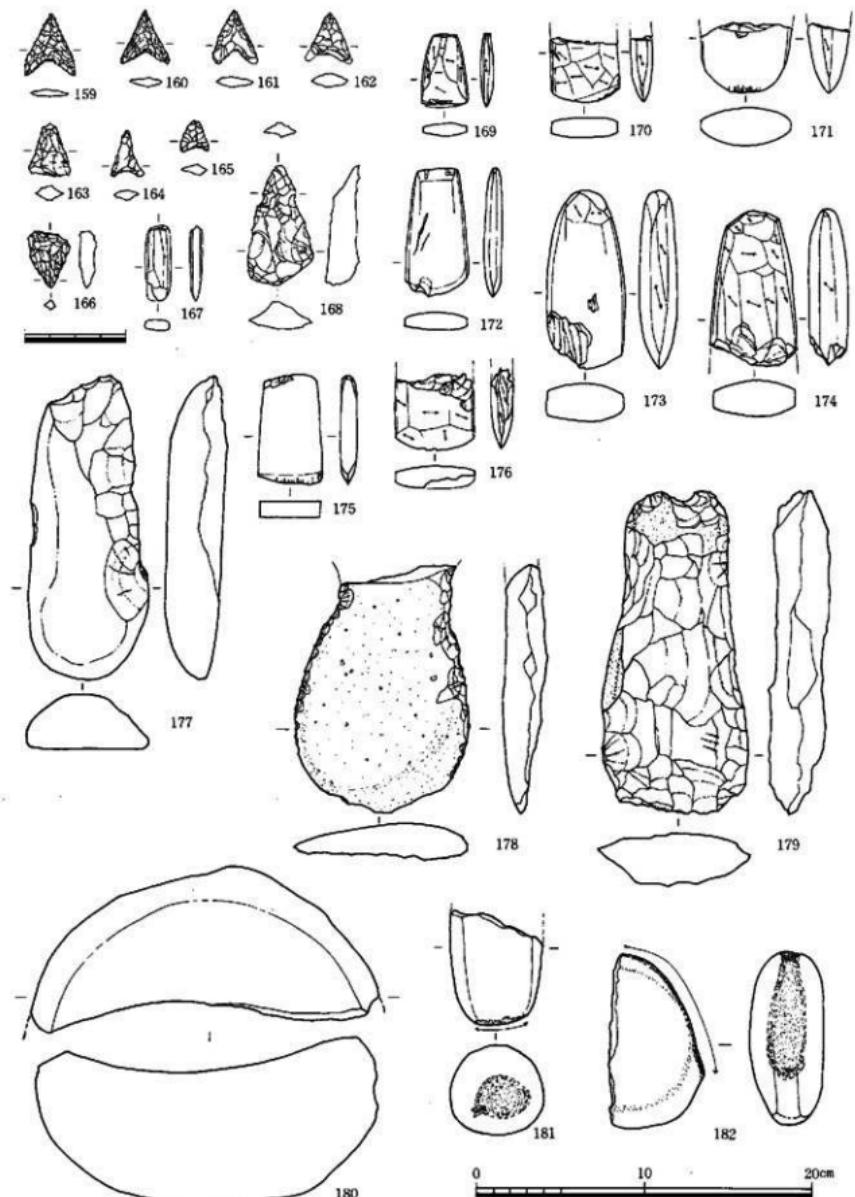
黒色土器 口径16cmの内面黒色土器で、底部外面は右まわりにロクロ削りが施される。

ヘラ書き文字 (第22図 158) 文字は甕頸外面にヘラ書きしたもので、2字認められ「是□」と読める。

(池野正男)



第22図 土器拓影図 (1/3)



第23図 造物実測図 (159~168は1/2・その他は1/3)

(4) その他の遺物 (第24図 106・107・図版20下・右側)

台地部から出土した越中瀬戸焼 2 点を含む。谷部のものは全て I ~ III 層から出土したものである。

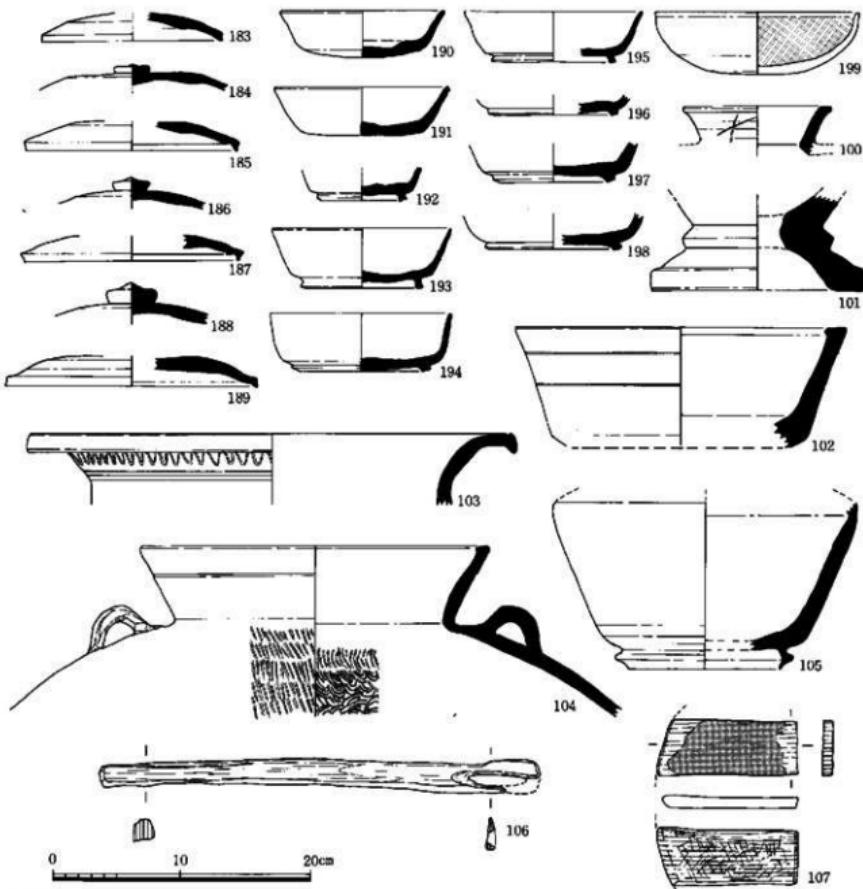
木製品 (106・107) 106は棒状品で、端を扁平にし、楕円形の穴を穿つ。107は曲物の底板と考えられるもので、内面に黒い漆状のものが付着する。外面には細かい直線状の傷が無数見られ組に転用されたものと考えられる。なお、切断は鋸により行われる。

珠洲焼 瓢の破片が 1 点出土している。外面に平行タタキが行われる。

土師器 杯である。底部外面に糸切り痕を認める。

陶磁器 大半は越中瀬戸である。器種は碗が多く、1 点台付の燈明皿がある。その他に唐津などが若干含まれる。

土人形 型押しで作られ、衿を付けた武士である。左脇に穴があり、刀が組み込まれるものと思われる。陶磁器、土人形ともに近世以降のものである。 (関 清)



第24図 遺物実測図 (1/4)

V 調査の成果

1 No18遺跡B地区の集落跡

この遺跡は奈良時代に主体をおく集落跡である。豊穴住居跡と掘立柱建物から成り、流団遺跡群の中では比較的規模の大きい類である。とりわけ1号建物は2×4間の規模を持ち、権を併設しているなど卓越した内容を持つ。流団内における集落の性格については、これまでにも示摘（池野他 1979、上野他 1980・1982、山本他 1984）されているように、近くに須恵器窯跡群を控えていることからその工人集団との関わりは無視できないが、この地域における掘立柱建物の成立過程の一端を示唆するものとして意義がある。したがって、主に豊穴住居跡と掘立柱建物が重複する地区に焦点を当て、若干の私見を述べる。

ところで、No18遺跡B地区的集落跡を考えるためににはそれぞれの住居跡の年代を考えることが前提となる。ここで大雑把な年代を考えておきたい。1号住居跡から出土している須恵器は基本的に流団No16遺跡1・2号窯初期焼成面の遺物に包括されると考えられる。しかし、44の杯蓋に見られるように端部が丸くなるものなどを含むことから若干の時間幅を考えざるを得ない。3号住居跡及びその上面すなわち建物に伴うであろう遺物には土師器、須恵器があり土師器はいずれもロクロ土師器である。須恵器は杯蓋が多く、その頂部から端部にかけてくびれるものがある。これはNo16遺跡2号窯の最終床面の遺物にこの傾向が見られる。これらのことから1号住居跡の遺物に比べ後出的であり、そこに時間差を見ることができる。したがって、この遺跡の時期を8世紀中頃を中心にその前後にある程度の幅を考えておきたい。

第4図に見るように調査区のはば中央に豊穴住居跡1棟と掘立柱建物が3棟集中する。1号住居跡との間に空白部が見られるが、これは耕作による削平により遺構が消失しているためで、おそらくはもっと密度の高い遺構のあり方を示していたと考えられる。前章でも触れたように1号櫛列は1号建物に、2号櫛列は3号建物に付随すると考えられ、溝03は3号住居跡の外周溝と考えられる。これを前提としてそれぞれの切り合いを見ると、1、2号櫛列は3号住居跡を切り、3号建物も3号住居跡を切ることから、すくなくとも3号住居跡が廃絶されてから掘立柱建物が建てられたことになる。2号建物と3号建物も切り合い関係にあるが、その新旧はわからない。

ところで、流団遺跡群における該期の住居跡を一瞥すると、No16遺跡では豊穴住居跡1棟と掘立柱建物2棟があり（上野他 1980・1982）、No7遺跡では5棟の掘立柱建物が検出されている。そして、No18遺跡C地区では2棟の豊穴住居跡があり（上野他 1982）、これらはいずれも8世紀前半とされる。一方8世紀後半のものとしてNo18遺跡A地区的豊穴住居跡1棟（池野 1980）とNo20遺跡の掘立柱建物4棟がある（池野他 1979）。これらのことから、この地域ではすくなくとも8世紀前半には掘立柱建物が出現しており、豊穴住居跡は8世紀後半まで存続していることを示す。つまり、8世紀代では豊穴住居跡と掘立柱が共存していることになる。このような中でNo18遺跡B地区は、正に過渡的な様相を示しているものと考える。

ところで、No18遺跡B地区における住居形態の差異をどのようにとらえるべきであろうか。確かに豊穴住居跡と掘立柱建物には時間差がみられた。しかし、流出遺跡群の中にはすくなくとも8世紀後半にまで豊穴住居跡が存在するのである。このことは単に時間の推移に解釈を求めることができないことを意味する。

北陸地方の掘立柱建物については、田嶋明人氏や湯尻修平氏が加賀・能登における掘立柱建物を類型化しその性格について考察されている（田嶋 1983、湯尻 1983）。湯尻氏は類型化の根柢の1つに建物平面積を取り上げ30m前後のものをIV類とする。そしてその性格を一般集落として位置づける。No18遺跡B地区はこのIV類に該当するが、建物群に近い所から円面鏡が出上していることや、第9図29・30に示すような特殊品の存在は湯尻氏が示唆するIII類す

なわち、小地域の郷長クラスの住居である可能性を内包する。反面、出土した須恵器の中には焼け歪みのものもあり、掘立柱建物に積極的な格差を見出せないのが実状である。この集落の存続期間はそう長くはなく、集団の交替期があったとは考えられず、住居形態の変化は同一集団内の事象と考えられる。そしてその背景として、おそらくは須恵器生産に関与したであろう工人集団の固定化が大きな要因と考える。すなわち、須恵器生産の拡大に伴いその生産管理のために必然的に集団の内的拡大をもたらし、既に一般化傾向にあった掘立柱建物を受容したものと考える。

ここでは流跡遺跡群の中での在り方について私見を述べたもので、そこには須恵器窯跡や製鉄跡などが集中していることを多分に意識したものである。したがって該期の集落跡について一般化していないことは自らが定めた神であり、今後の課題とする。

2 No.19 遺 蹤

この遺跡は住居跡などが立地する台地部とその北側に位置する谷部からなる。遺物の在り方からすれば、同一の遺跡であり、谷部の遺物は台地部からの流入と考えることができる。台地部は調査の過程で半分を次年度以降に繰り越したために全体を把握することはできず、夥しく検出されたビット群の性格付けについても次年度以降に持ち越すこととした。なお、旧石器時代の遺物と相輪については、それぞれの項で考察がなされているので、ここでは遺物の主体を占める縄文前期の土器について述べることにする。

該期の土器については小島俊彰氏の一連の研究〔小島 1968・1978〕があり、また、大門町小泉遺跡を媒介とした高橋修宏氏の考察〔高橋 1982〕や越坂一也氏の論考〔越坂 1983〕があり、大局的には不動の位置にあると考える。この遺跡での遺物の在り方が層位的に分類できなかったことと、すべて細片で器形を窺い知るに足りるものがないことから、これら先学の業績に黒らし位置づけをする。

前項で分類の目安としたのは文様に主体をおいたもので、それぞれ分類されたものが同一個体あるいは同時期の可能性を持つ。つまり台地部の遺物で分類した羽状縦文などは19を除いては部位が不確定であり、IV類の連続爪形文やV類の連続隆起線文と結合するものも存在するものと考えられる。このことは逆説的に時間幅のあるものを一括しようとする危険性をも内包するが、蜆ヶ森I式に見られる微隆起線文系の土器が全く見られないことから、多分に短い時間の中で理解できよう。

ここで分類した文様で主流を占めるのはV類の連続爪形文で、その間隔に大小の多小のばらつきがみられるもの、連続隆起線文、鋸歯状印刻文などをも含むことから、蜆ヶ森II式から福浦上層式に含まれる上器群として位置づける。この時期の遺跡を近くに求めると、大門町小泉遺跡〔高橋 1982〕や小杉町上野遺跡〔橋本 1974〕があり、当遺跡の土器形式を全て含んでいる。石器では石鏃と磨製石斧の多いのが目につく。小泉遺跡上部包含層では全ての石器が報告されており、No.19遺跡台地部の石器との対比では、石鏃3に対し16点、磨石3に対して2点、磨製石斧4点に対し15点、石皿1点に対し1点とその組成にはばらつきが見られ、石鏃と磨製石斧の多さでは小越する。他にこの遺跡では石剣、石錐の他に玉類や块状耳飾の多いのも特徴的である。块状耳飾については、藤田富士夫氏の一連の研究成果〔藤田 1978・1983等〕と矛盾するものではなく、むしろ補強することになる。打製石斧が全く見られないことは、高橋氏の指摘〔高橋 1982〕にもあるように北陸地方に一般的に見られる現象である。

このようにこの遺跡に見られる石器組成から考えられることは、これらの石器や块状耳飾を保有した集団がある一定期間、安定した生活基盤のもとに居住していたと考えられる。今回の調査では明確な前期の住居跡等は検出しえなかつたが、ここに数棟の住居跡が在りし射水丘陵台地を舞台に活躍していた人間集団を想起する。なお、石錐の出土が1点もなかったことを付記しておく。

(関 滉)

3 相輪について

1. 類例 今回調査によりNo19遺跡から相輪が出土した。以下類例を示す（名称等は各文献による）。

隆興國分寺 水平4年に落雷により焼失したとされる七重塔跡から相輪が出土している。擦管先端部は青銅製で、下端の径21cmの太さをもち、4本の管を溶接によって組みぐ。水煙は火炎部先端の破片で、片面の鋳型鋳造品である。九輪は幅約17cmの帯状の破片で、復元径は約180cmと推定され、外に扇状の耳が付く。塔跡の初層は一辺33尺ある。

池崎窯跡 須恵器窯跡の灰層から、瓦塔・鳥形土器・九輪が須恵器と共に出土している。九輪は1点のみで、下部径が50cm、ヘラケズリをした上部孔径が16.8cmの大きさである。中央の孔は立ち上がりをもつ。

戸津31号窯跡 須恵器窯跡の床面・覆土中より、多くの器種の須恵器と共に水煙・九輪等が出土している。水煙は112件完成品が1点と、別に羽根部が複数個体ある。この水煙は千枚羽根型に属し、高さ69.7cmで、全幅50.5cmの大きさをもつ。心柱を受ける下部内径は20cm、上部内径12cm、深さ47.2cmで、羽根部の高さが50.5cmで10箇所に透し孔をあける。九輪は7個出土し、最大のもので、下部孔径63.4cmで、上部孔径20.6cm、高さ10.5cm、厚さ2.2cmで、肩部にタキ痕を残す。小さい九輪は下部孔径が30.5cm、上部孔径15.5cm、高さ5.1cmである。また受花と考えられている範囲陶板が4枚ある。大きさは全長18.3cm、幅5cm、厚さ0.8cmで、先端は丸く、下端に幅2.5cmの突起部が付く。

宝谷磨寺 開川の際に鉄製の相輪と心礎が出土した。水煙の破片は片面鋳出しである。宝珠破片の推定復元径は、径23cm、高さ21cm前後とされ、穴の径は7cmである。心礎は中央に納穴を穿孔し、心柱の径が約60cmである。

陶邑古窯群MT5-1号 須恵器窯跡からの陶製品の出土品で、厚さ約2.5cmの長方形粘土板に透かし彫りを行う。水煙状にした青灰色の製品で、塔婆の水煙か、または仏像の光背を考えられている。

三栖磨寺 心礎と九輪がみつかっている。九輪は石製の破片12点があり、いずれも砂岩質で一材より造られており内輪・外輪および6本の繋ぎより構成される。内輪の擦に接する内径が22cm、外径40cmである。繋ぎは約60度をなしており6本の構成が推定されている。外輪下面には水切用と思われる幅約5cm、高さ約1.5cmの目連いを造り、下端には2個1組の風鐸を吊るした小穴がある。金銅鐸舌は九輪残片の附とされる三葉の舌である。

山村磨寺 塔は1辺8.5mの瓦積で、心礎は径72cmの柱座に舍利孔をもつ。相輪は7個以上の九輪と4個の擦が出土している。九輪は一材で内輪と外輪と6本の繋ぎを作る。擦は径30cm、厚さ4.5cmの円筒であり、高さ44~26cmまである。九輪には各々6個の風鐸をつける。

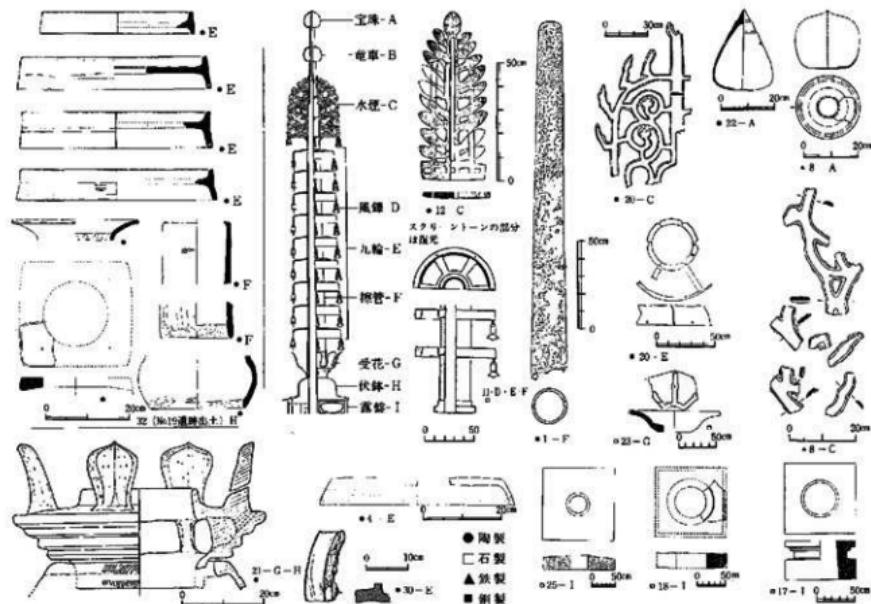
札馬47号窯跡 須恵器・瓦を焼いた窯跡で、相輪の一部として証（受）花・伏鉢が出ている。伏鉢の内径は約35cm。

伊丹磨寺 銅製水煙は1枚羽根で、現高115cmで下半を欠く。銅製九輪は塔跡より一括出土し、覆輪・轔・轔等の破片であり、三輪分を数える。覆輪の下端の内径は108・104・92cmあって、高さが16.5cm前後あり、6本の輦は中央環状の轔につながる。覆輪の下端には風鐸をつる穴がある。他には刹管・水煙取付金具と推定されるものがある。

鹿和光寺 塔跡より礎石・心礎が抜きとられ、復元が困難とされる。出土品には復元径約90cmの青銅製九輪の破片4個と、復元高さ約20cmの青銅製風鐸の4点がある。

横見磨寺 復元径約65cmの須恵器・ねずみ色の破片で、九輪が想定されている。縁端部に細かいタキ痕がある。

2. 性格 相輪の出土地は寺院跡（塔跡）・生産遺跡とNo19遺跡のような須恵器窯跡群内の集落跡の三者がある。材質では寺院跡で銅製が最も多く、他に青銅製や金銅製のものもちらりとある。鐵製では表①・⑧があり、石製では⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱がみられ、銅製と併用される例もある。陶（瓦）製には⑯・⑰・⑱の寺院跡と④・⑤・⑯の須恵器と⑰のような瓦も焼いた窯跡例がある。中村浩氏（中村 1985）は「須恵器製であるのは異例である。これは恐らく金属製品の入手が困難であった当該生産地と関わりのある氏族からの要請によって作られたと考えられる」とされる。



第25図 相輪関係図

順序番号	所在地	時代	種類	材質	大	順序番号	所在地	時代	種類	材質	大
1	新潟県小千谷市 市立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1801「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立小学校	17	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1802「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立小学校
2	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1803「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	18	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1804「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校
3	新潟県小千谷市 中野町	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1805「新潟市中野町」 新潟市小千谷市立中野町小学校	19	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1806「新潟市中野町」 新潟市小千谷市立中野町小学校
4	新潟県 小千谷市一ノ郷町	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1807「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立一ノ郷町小学校	20	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1808「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立小学校
5	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1809「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	21	新潟市立中学校 片山町校舎	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1810「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立中学校
6	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1811「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	22	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1812「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校
7	新潟県小千谷市 合川町	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1813「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立合川町小学校	23	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1814「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立小学校
8	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1815「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	24	新潟市立中学校 片山町校舎	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1816「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立中学校
9	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1817「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	25	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1818「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校
10	新潟県小千谷市 内野町	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1819「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立内野町小学校	26	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1820「新潟市小千谷」 新潟市小千谷市立小学校
11	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1821「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	27	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1822「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校
12	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1823「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	28	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1824「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校
13	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1825「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	29	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1826「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校
14	新潟県 新潟市西区片山町 片山町立小学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1827「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校	30	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1828「新潟市片山町」 新潟市西区片山町立小学校
15	新潟県 新潟市 新潟市立中学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1829「新潟市」 新潟市立中学校	31	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1830「新潟市」 新潟市立中学校
16	新潟県 新潟市 新潟市立中学校	明治 1873年(明治6年)	陶製	丸輪	1831「新潟市」 新潟市立中学校	32	新潟県 市立小学校	明治 1880年(明治13年)	陶製	丸輪	1832「新潟市」 新潟市立中学校

表9 相輪関係一覧

また陶製九輪の形態には④・⑤と、No19遺跡の覆輪部とこの内側に円板を取り付けた二者がみられる。後者は⑪・⑫の石製があり、⑬の銅製例では内輪との間につなぎをもち空間を設けて降雨に対するそなえとなっている。しかしNo19遺跡や④・⑤には空間が設けられず、雪・雨等の自然条件に耐えられるのか、または塔の上で充分な強度を有するのかどうか等の問題がある。陶製品の九輪は銅製・石製に比べ約3%から3%と小形品が多く、それらは強度からの制約等が考えられるが、今後消費・生産遺跡の類例をふまえながら今後の課題としてゆきたい。

■2 なお、表は引用文献によるが誤りがあれば当方の責任であり、更に補正を加えていきたい。

類例の追加 脱稿後以下の例を知りえた。

筑波庵寺（茨城県筑波郡筑波町） 石造露盤1点が出土。大きさは一辺約0.9m、高さが約30cmで中央に径30cm程の穴をくりぬく〔高井 1978〕。

下君山庵寺（茨城県稻敷郡江戸崎町） 石造露盤1点が出土。大きさは一辺約1.4m、高さが25cm程で中央に径70~80cmの穴をくりぬく〔高井 1978〕。

風呂ヶ谷瓦窯跡（群馬県藤岡市金井） 瓦製水煙が出土。厚さ2.5cm程の粘土板にU字状の切り込みを入れる。表と裏に同一の線刻文様を描く〔外山他 1981〕。奈良~平安時代。

海会寺跡（大阪府泉南市信南大苗代） 法隆寺式の伽藍配置をもつ。講堂の基壇南辺より相輪部材（水煙・伏鉢・露盤等）が出土〔泉南市 1985〕。白鳳時代。

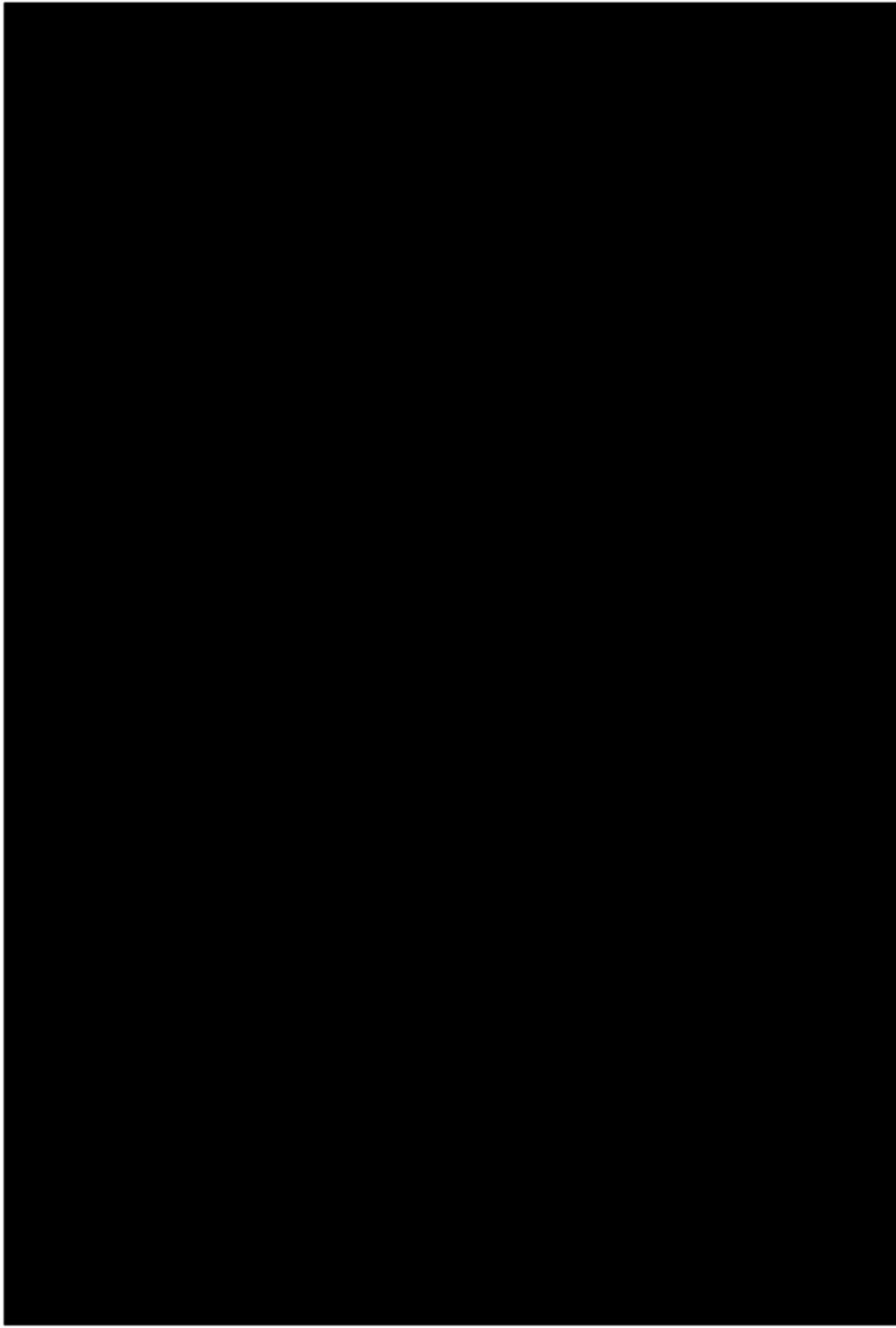
註① この点に関しては森藤隆氏が、青岡泰英氏より指摘を受けた事柄にもとづく。

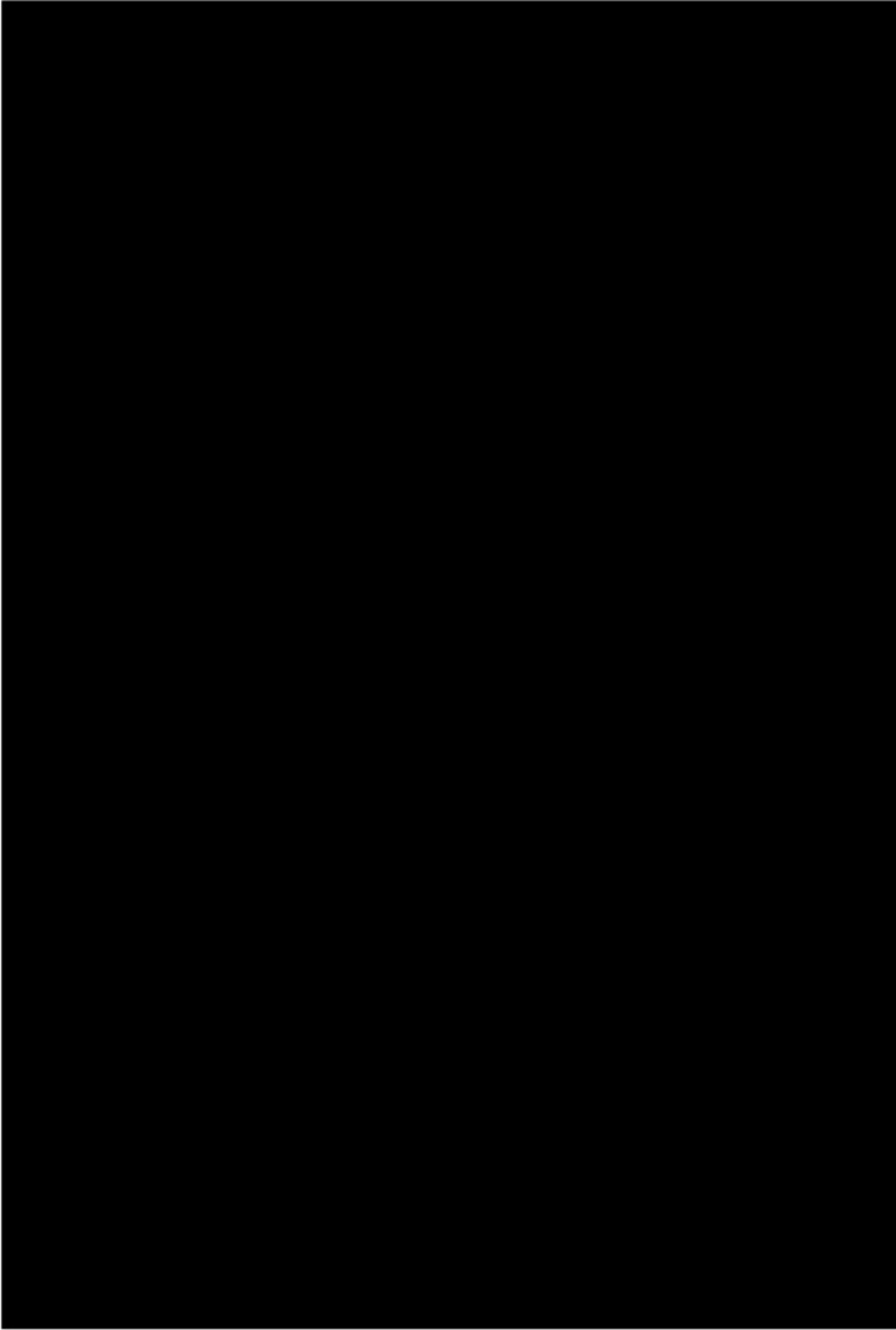
② 表の作成は森藤隆氏の労による。文献は小村茂・宮下幸夫・青木豊・松本友之氏の各氏から押送した。またD津窯跡の相輪は、小村茂・宮下幸夫氏より実見の機会を得、多くの教示を受けた。諸氏に深く感謝します。

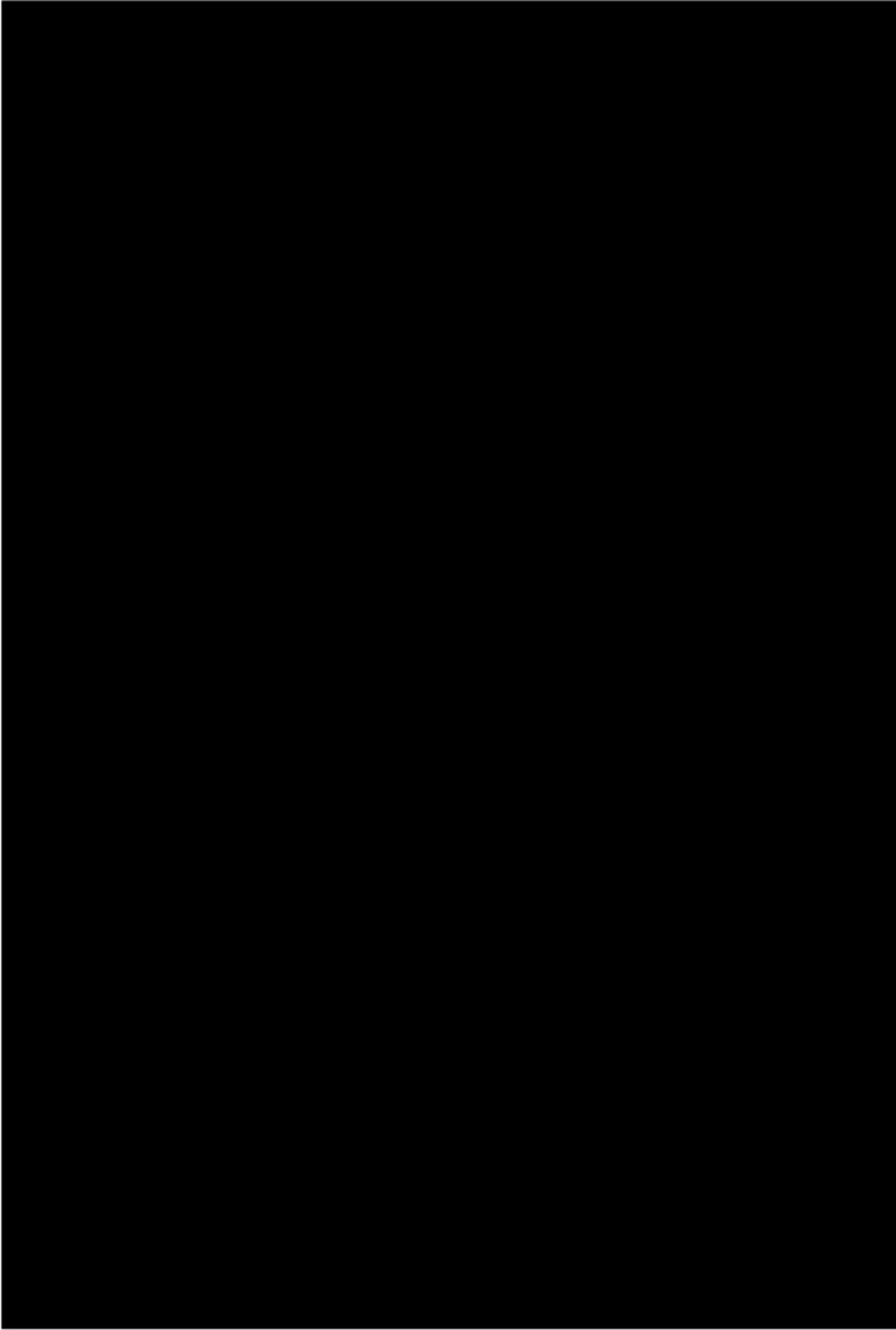
(上野 章)

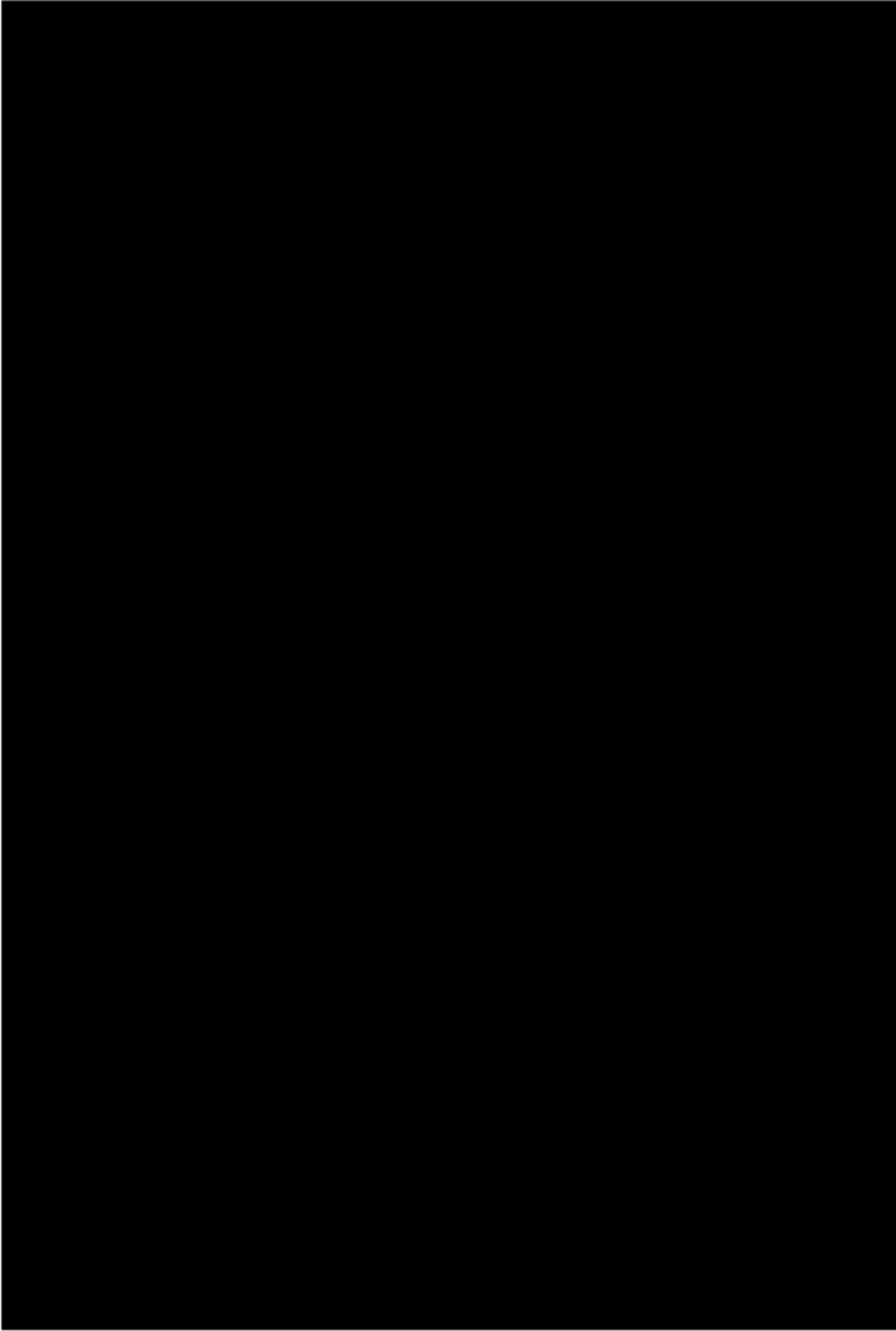
引用・参考文献

- ア 菅木ヨシ 1970 「東日本編文時代後・晩期の網代編について」『物質文化』第15号 物質文化研究会
イ 池野正男・山本正敏・酒井重洋 1979 「富山県小杉町流通業務団地No20遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
ウ 上野 章・池野正男 1980 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
上野 章・池野正男・狩野 雄・富田進一・久々忠義 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
コ 越坂一也 1983 「北陸における編文時代前期中・後葉土器の編年について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
小島俊郎 1978 「北陸における編文時代前期末の様相」『信濃』第20巻4号
小島俊郎 1978 「富山県滑川市安田古宮遺跡発掘調査報告書」滑川市教育委員会
小島俊郎 1979 「滑川市史 古考古資料編」滑川市
泉南市教育委員会 1985 「海会寺跡発掘調査現地説明会資料」
タ 高井柳三郎 1978 「茨木の古瓦について」『茨城県歴史雑誌』第5号 茨城県歴史館
高橋修宏編 1982 「小泉遺跡」 大門町教育委員会
高瀬勝彦編 1983 「野々市町御経塚遺跡」 野々市町教育委員会
田嶋明人 1983 「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡―加賀・能登の振立柱建物群を中心とした観察」『北陸の考古学』石川考古学研究会
外山和夫・岡部央・中村美加編 1981 「群馬の古代寺院と古瓦」 群馬県歴史博物館
ハ 橋本 正 1974 「小杉町上野遺跡-記録写真編-」 富山県教育委員会
浜島正士 1979 「塔の建築」 日本の美術
フ 藤井昭二 1962 「表層地質調査 富山」 富山県
藤田富士夫 1978 「糞状耳飾の起源について」『富山史論』69号 越中史論会
藤田富士夫 1983 「糞状耳飾の編年に関する一試論」『北陸の考古学』石川考古学研究会
ヤ 山本正敏・蒼藤 隆 1984 「1.No16遺跡」『富山県小杉町・大門町流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
ユ 渡見修平 1983 「第1章 加賀能登における振立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会









図版 1

No.18—日遺跡

1. 遺景

南から



2. 1号住居跡

東から



3. 1号住居跡

北から



4. 2号住居跡

北から



図版 2
No.18-B 遺跡



1. 3号住居跡
南から



2. 1号住居跡
北から



3. 1号住居跡
P-01



4. 1号住居跡
P-02



5. 1号住居跡
排水溝

図版 3
No.18—日遺跡

1. 2号住居跡



1

2. 3号住居跡
カマド



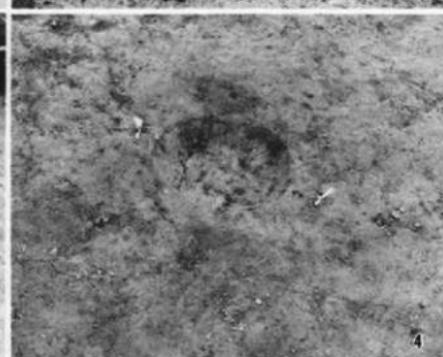
2

3. 溝01



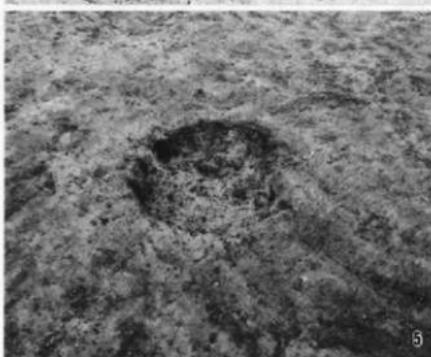
3

4. 穴04



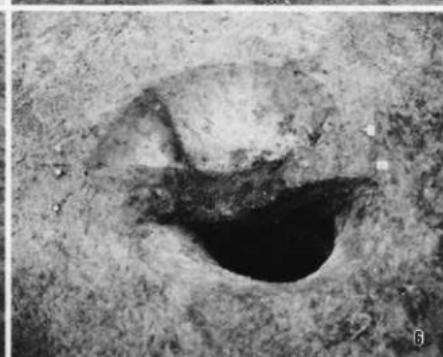
4

5. 穴05



5

6. 穴07



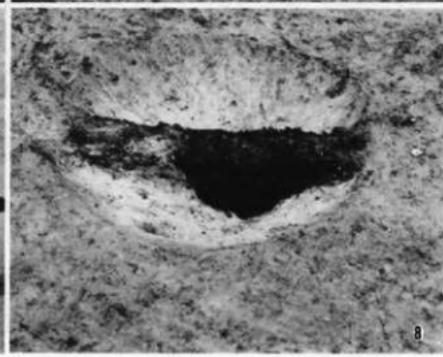
6

7. 穴08



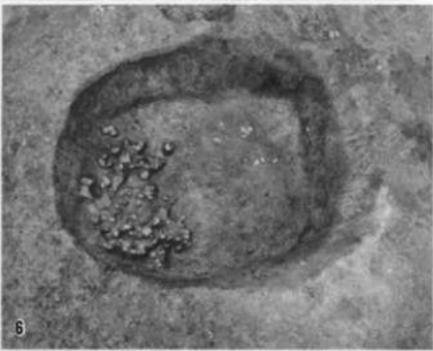
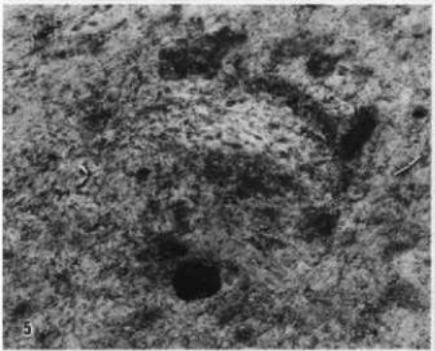
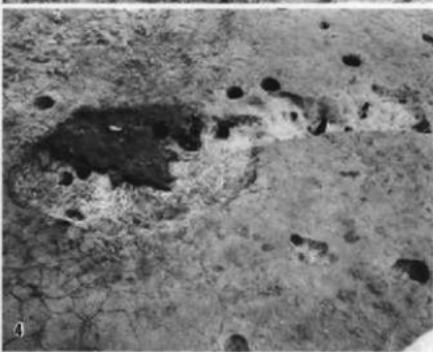
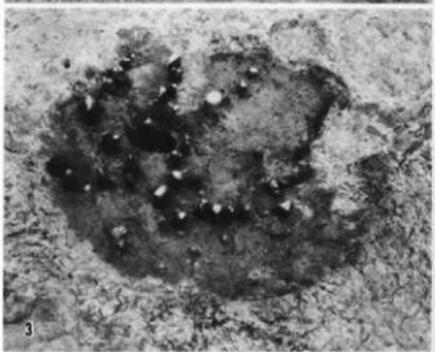
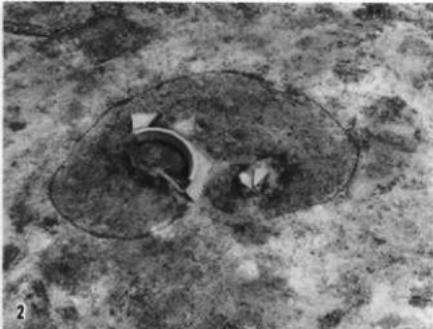
7

8. 穴09

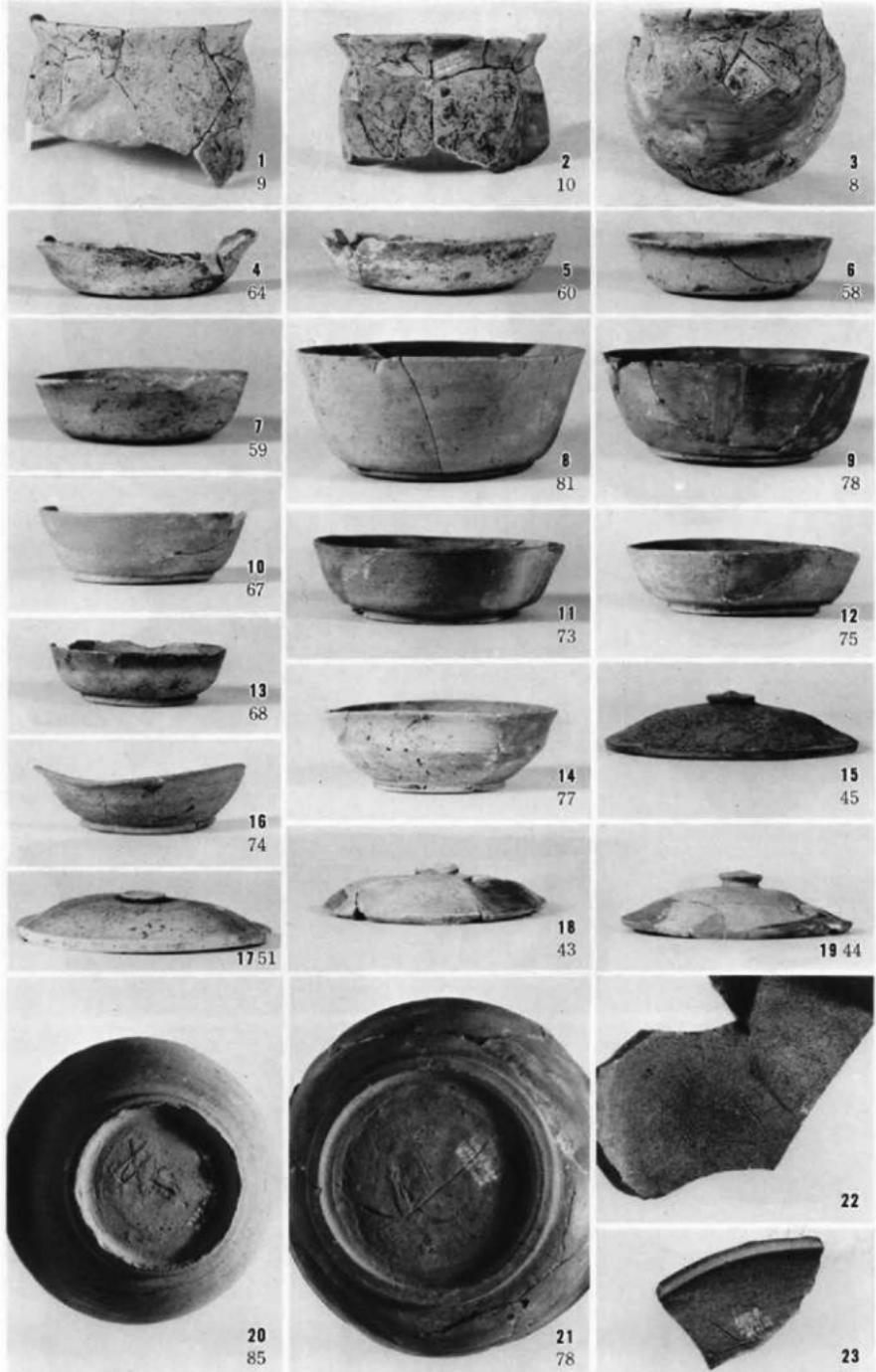


8

図版 4
No.18—B 遺跡

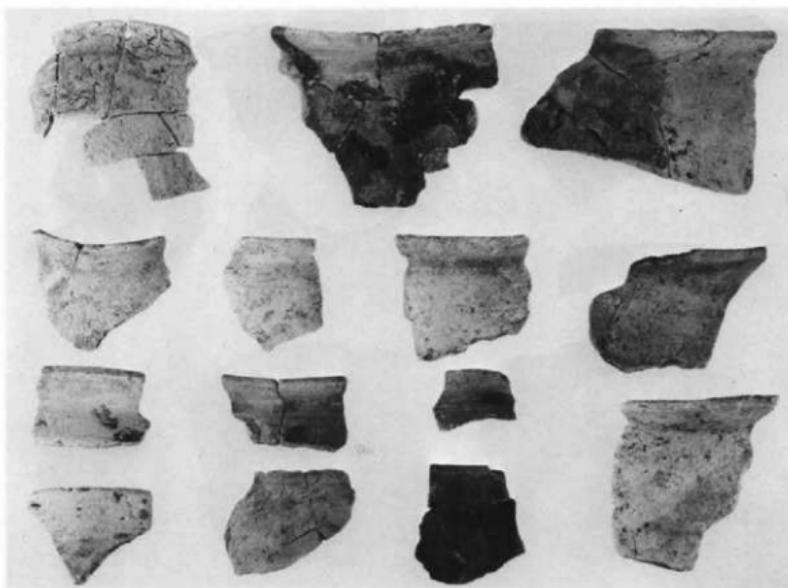




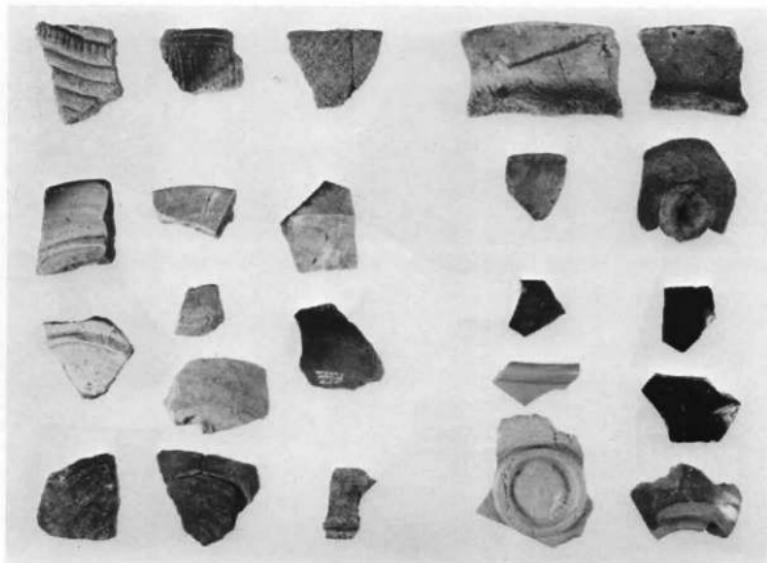
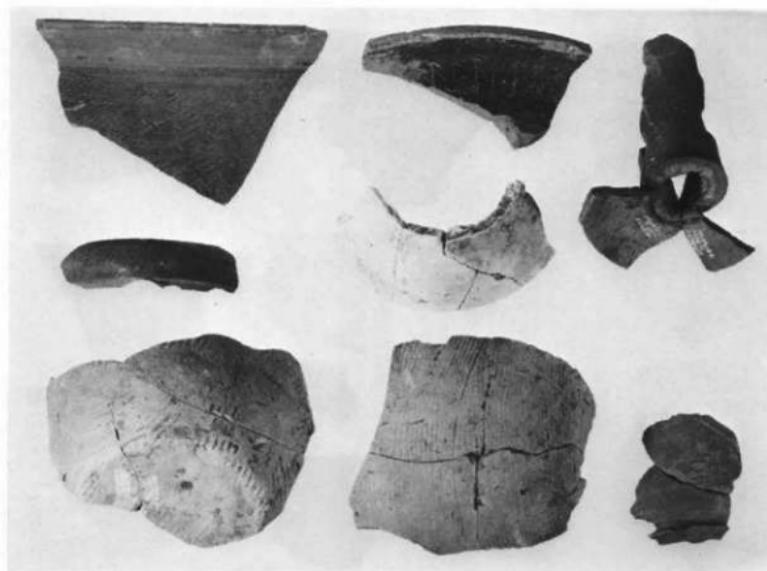


出土遺物
(約 1/3, 20~23
は約 1/2)

図版 7
No.18—B 遺跡



出土遺物
(約 1/3)



出土遺物
(約 1/3)

図版 9
No.19遺跡

1. 遺影
北から



2. 遺影
東から



3. 一次遺構面
検出状況



4. 住01・02
南から





1. 2次造構面
検出状況



2. 谷部発掘前
西から



3. 谷部発掘後
西から



1.谷部
東から

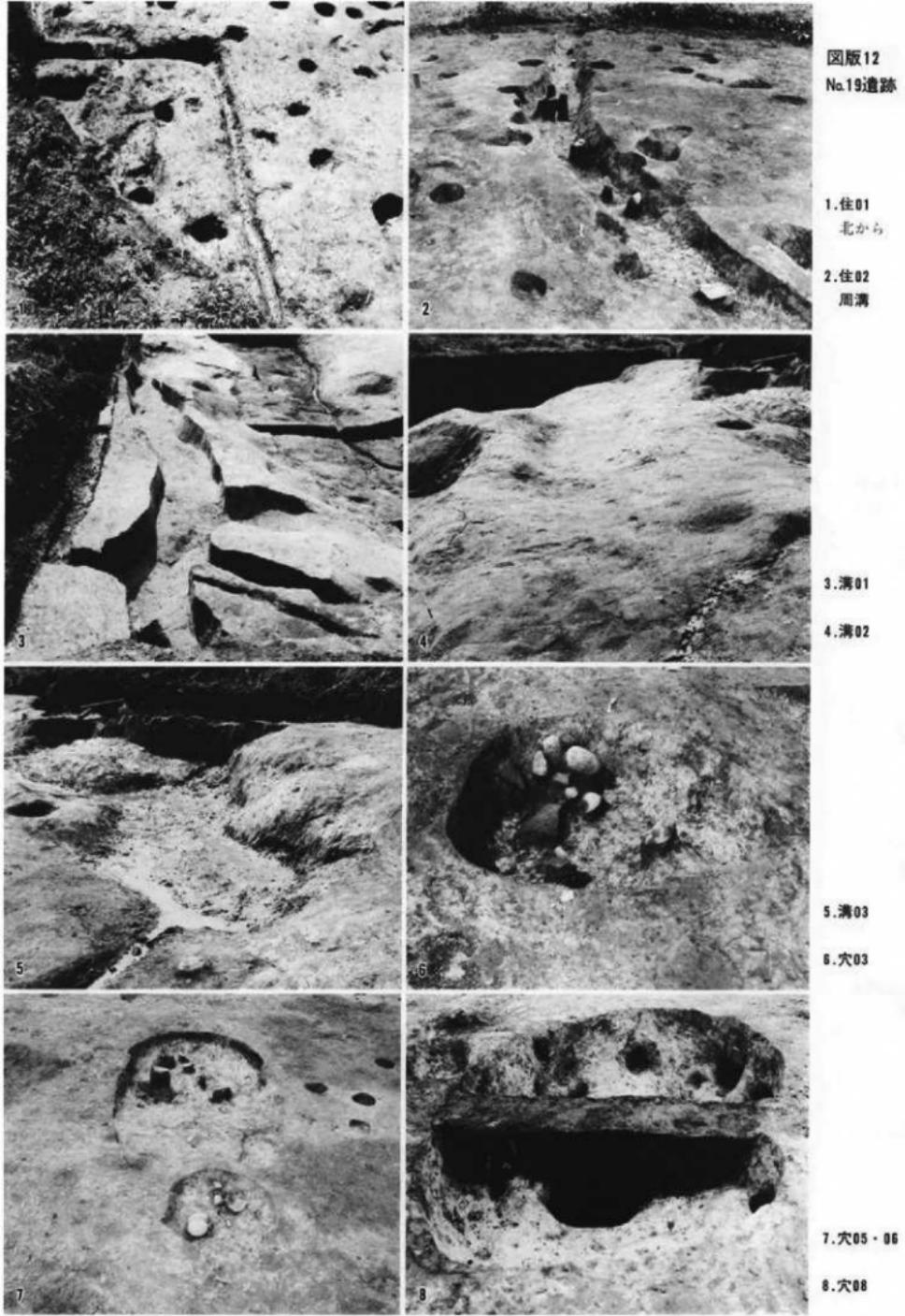


2.同上



3.土層断面

図版12
No.19遺跡

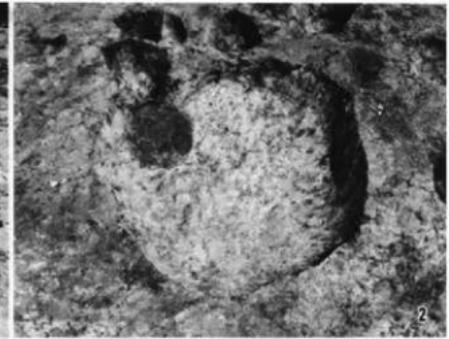


圖版13
No.19遺跡

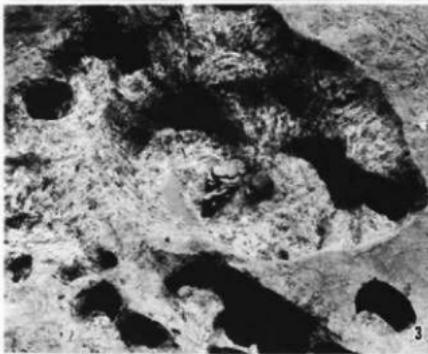
1.穴14



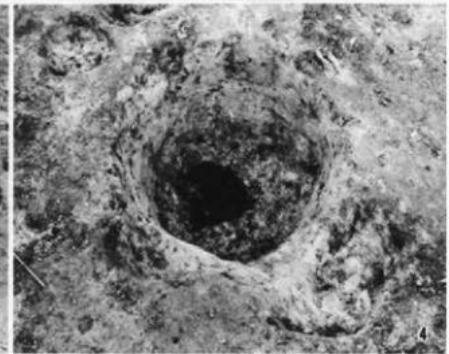
2.同上



3.穴19



4.住02
柱穴



5.穴51



6.穴67

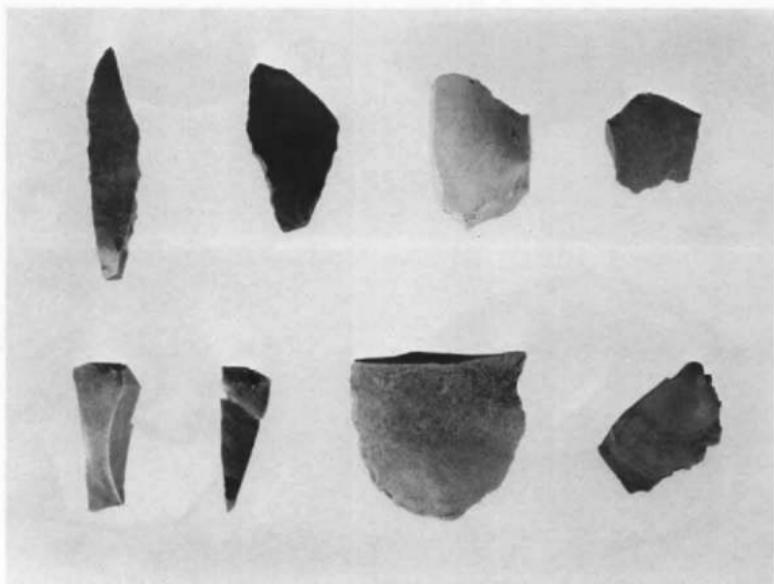
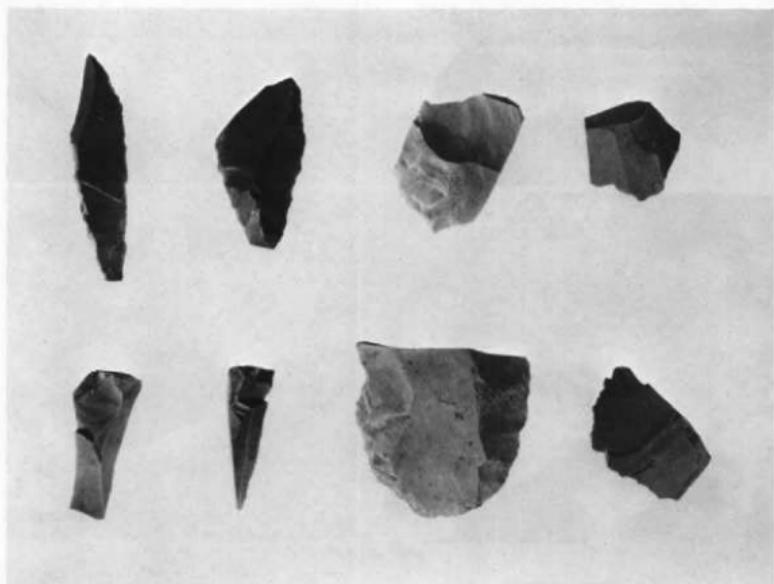


7.穴92



8.相輪出土狀況

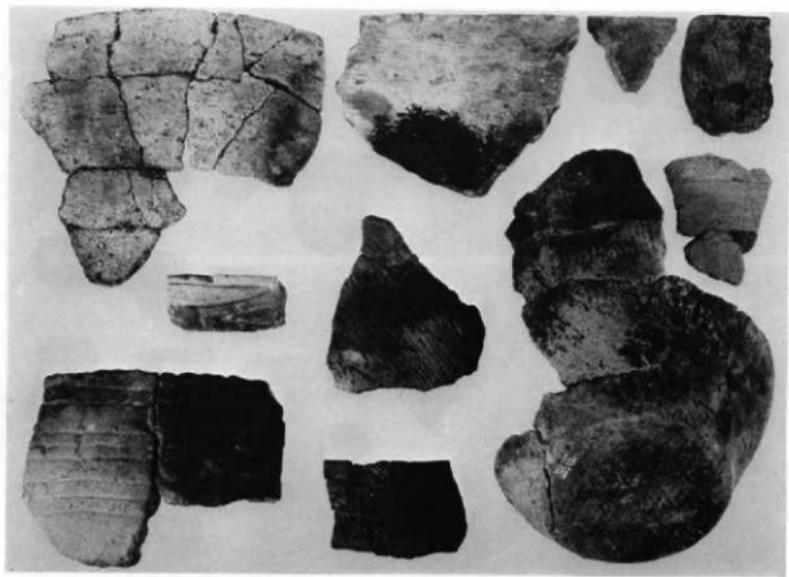




図版15
No.19遺跡

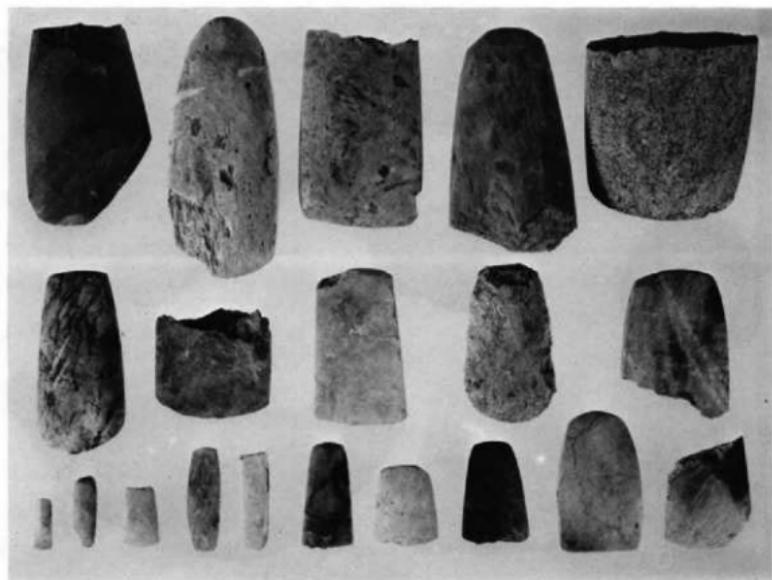
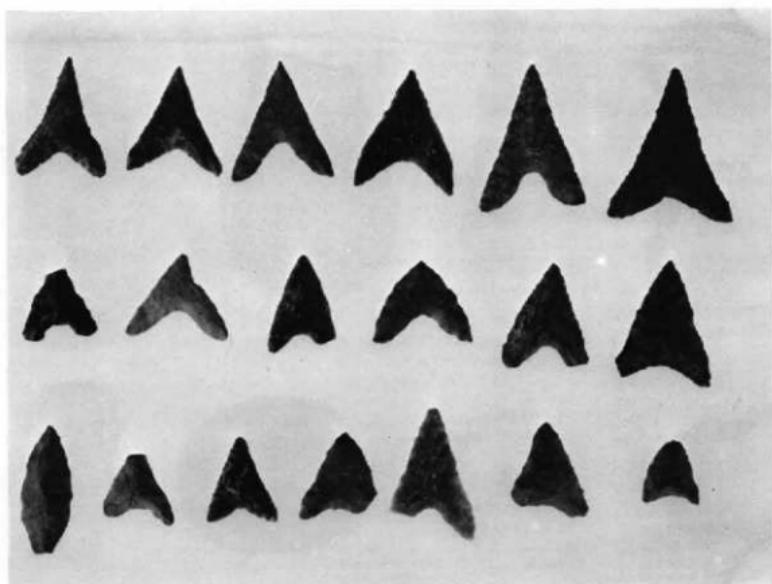


出土遺物
(約 1/3)

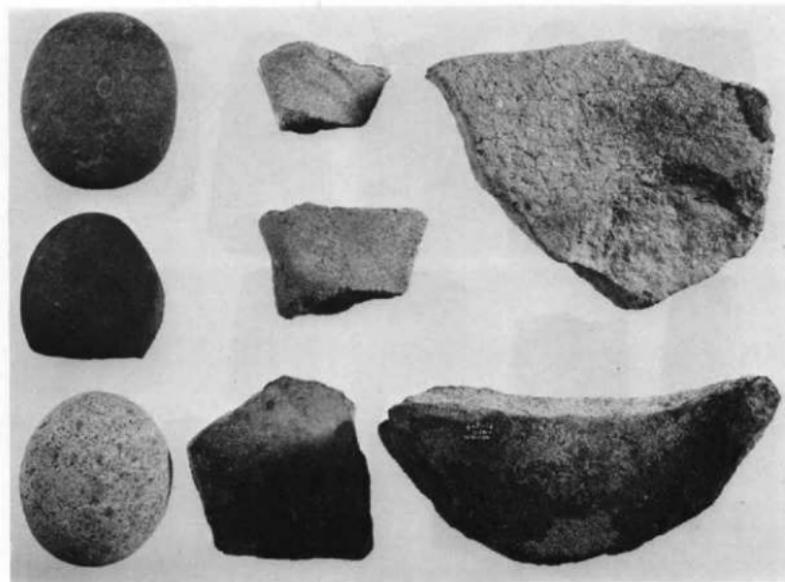
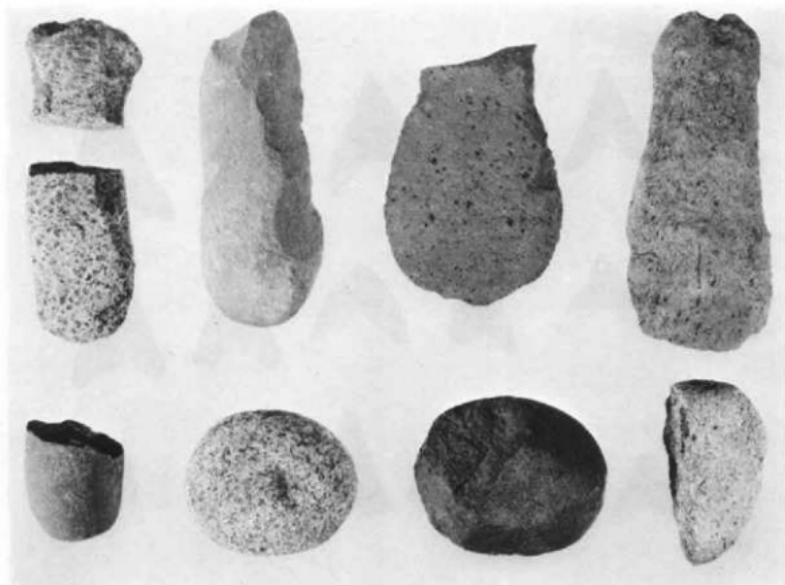


出土遺物
(約 1/3)

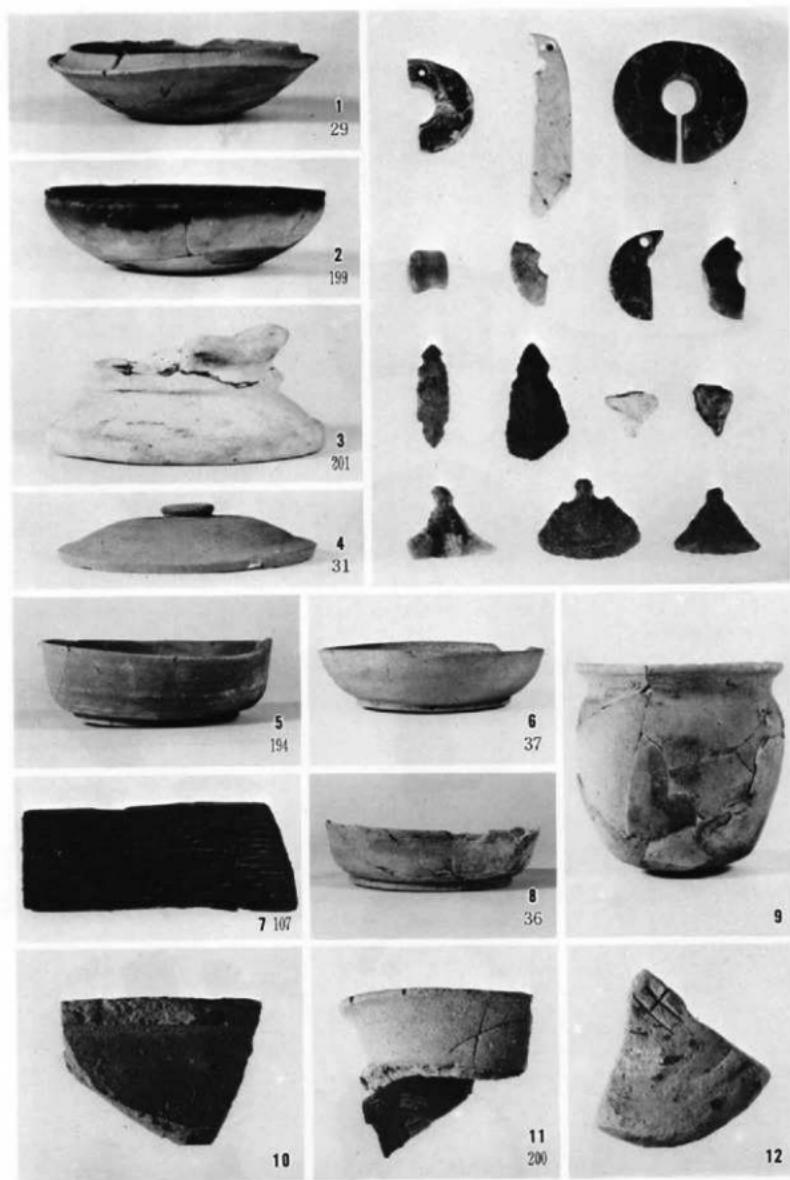
図版17
No.19遺跡

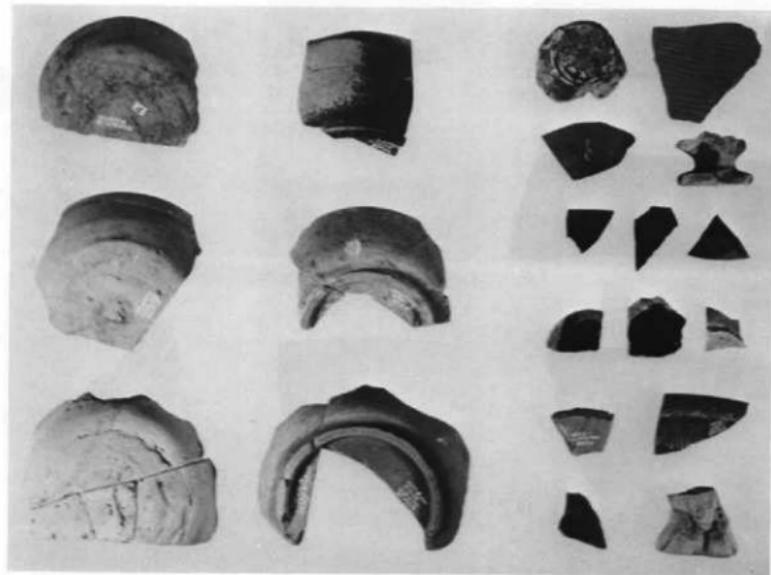
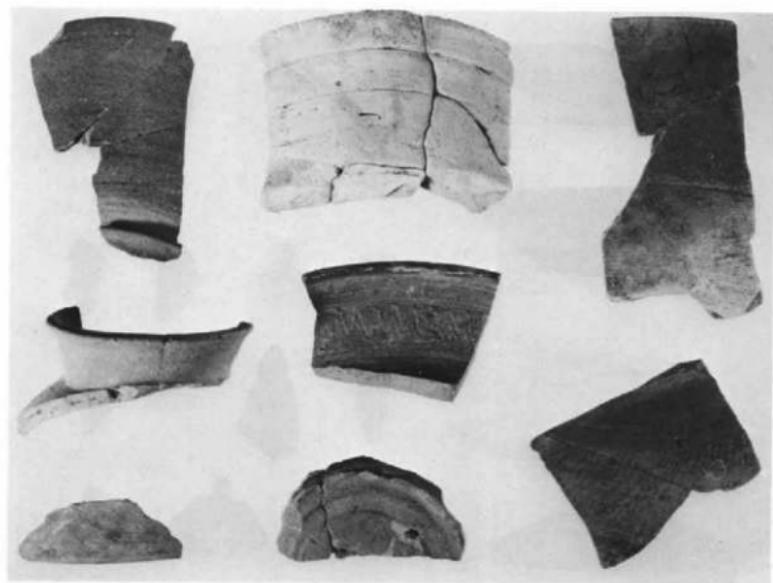


出土遺物



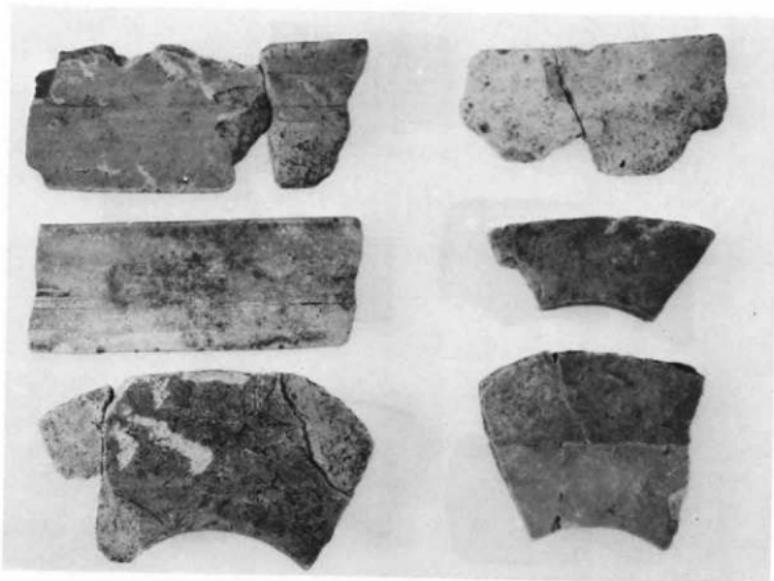
図版19
No.19遺跡



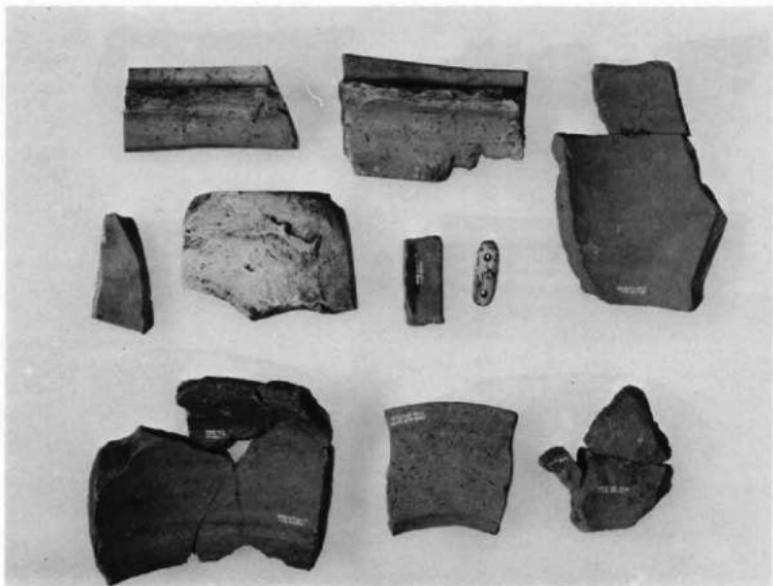


出土遺物
(約 1/3)

図版21
No.19遺跡



出土遺物
(約 1/3)



出土遺物
(約 1/3)

図版23
No.19遺跡



1~5. オニグルミ, 核 6~11. アカガシ亜属, 穗果 12~15. コナラ亜属, 壳果 16. コナラ属, 壳果 17・18. トチノキ, 果実 19・20. トチノキ, 外果皮 21. トチノキ, 幼種子 22. トチノキ, 幼果 23. トチノキ, 種子 24. トチノキ, 種皮 25. ニワトコ, 種子 26. ミズキ, 核 1-X10・11Y7 2, 5~11, 19, 21, 22, 27-X13Y12 3-X13Y10・11 4-X13Y9 12~15, 16, 23-X13Y8 16-X14Y12 17-X12Y11 20-X12Y12 24~26-X13Y13

小杉流通業務団地No.18遺跡B地区・No.19遺跡発掘調査参加者

浅井長作・宇多外吉・上谷信一・木原茂・窪池義信・窪池義文・黒田清・光地茂義・清水友博・島田修一・下越清作
菅野高信・大松茂治・宿屋重信・高田保通・高山又造・土橋設男・寺口信吉・土佐重雄・野田旭・萩原舜逸・長谷友義
広林孝三・堀勇一・前田春作・松永信治郎・水上利雄・山崎政廣・山田健作・山本敏男・吉岡信雄
市井くに子・上谷アキ・後美佐子・小倉道子・北川愛子・北川将代・久野かのい・久野藤江・京角外枝・京角とみ子
窪池ソエ・窪池礼子・熊本好子・黒川愛子・黒田せつ・黒川信子・下条菊枝・光地忠信・光地はる・御後利子・小西イミ子
近藤美栄子・酒井聖子・佐賀和美・沢みさ・篠原ちよ子・白石邦子・宿屋とき・高田春子・田畠ゆき・徳井唱
水井加里枝・西野といし・西野浪子・野村敦子・萩原とみ・針原美千代・平野すゑ・福田芳子・堀ゆき江・宮林俊子
・宮林都・村上一美・盛田きのゑ・山口なみ子・山崎弘子・山崎ふみ子・山下アヤ子・山下たつ子・山下ナミ
・山星たみ子(敬称略・男女別50音順)

小杉流通業務団地No.18遺跡B地区・No.19遺跡出土遺物・資料整理参加者

阿部利子・入井智子・浦沢純子・大滝ひろみ・尾崎靖子・斎藤裕代・杉崎容子・須藤順子・竹内勤子・土田節子・土田ユキ子・坪田和子・西野美和子・荒田美智代・向井しづ子・村井睦子・山口チズ子(敬称略・50音順)

富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第8次緊急発掘調査概要 No.18遺跡B地区・No.19遺跡

昭和61年3月31日発行

編集 富山県埋蔵文化財センター
富山市茶屋町206番3号

発行 富山県教育委員会

印刷 北日本印刷株式会社
